
Babyleaf

河東悠美

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

B a b y l e a f

【Nコード】

N 9 4 3 8 Z

【作者名】

河東悠美

【あらすじ】

自サイトにも掲載しています。

<math>1t \cdot 1 \>

気になる異性はいますか？

好きなんだから仕方ない。

知られたくは絶対でない。

そんなことになったら生きていけない。

野々村里奈がどういう少女かと尋ねると、答えは二通り返ってくる。

「頭がよくて、美人で、副委員長なんてやってるんだから面倒見がいいんじゃない？ 大人っぽくて頼れる って感じ」

これには本人、苦笑い。

絶対に私は面倒見がいい人間じゃない。

副委員長になったから、必然的にクラスのおかーさんになっちゃってるんだよ。

ではでは、もう一つの意見。

「はあ？ 小生意気なガキんちよだろが。化粧なんて家でするな、よそいってやれ。不真面目極まりないね、おまえなんて。甘ったれだよ、マジで」

せめて小娘にしてくんないかな。

がきんちよなんてあんまりなんだけど。
甘ったれで悪かったね。

あんたにしか甘えてないよ、私は。
ふーんだっ。

里奈をがきんちよ呼ばわりする相手の名前は都村聡明という。

里奈の家庭教師を務めている大学院生だ。

聡明が家庭教師にくる日は月曜日と木曜日。

その日はいつもより早めに学校から帰って、着替えて、身支度をす
る。気合が入りすぎるときにはお風呂まで入ったりする。

その日の晩御飯が餃子とか焼肉だったりしたら、聡明が帰るまで食
べないで我慢する。でも、お腹が鳴るのは嫌だから、小さいおにぎ
り一つくらいは食べるけど。

歯磨きは必須。

何があるかわかんないので、必須。

そこにキスなんて単語を期待するあたり、里奈にも夢見る少女的な
部分もあったりする。でも、そんなことが絶対にならないことは重々承
知だが、欠かせない。

学校ではお行儀よくまとめている髪をほどいて、大人っぽくして
みる。

ファンデーションを塗って、ルージュをひいて。

マスカラとかはやりすぎだから、ちょっとだけまぶたにパールを乗
せて。

睫毛は実はパーマをかけているから常にくるりん状態。

わりと上手になったよね、お化粧。

聡明には制服では絶対に会わない。

七歳も年下だということを、あまり意識させたくない。

里奈がかなり意識してこんなに背伸びしてるのに、聡明ときたら、

「がきんちよ」

と、言い捨てる。

「女ゴゴロのわかんないヤツ」

とも言えばきつところ言ってくるはず。

「女？ 誰のこと言ってるんだ」

ああムカツク。

でも好き。

こんなときに頭の中で告白してどーするんだ、野々村里奈。

「副委員長」

この呼ばれ方。

里奈はむっとしてしまう。野々村里奈って名前があるんだよ、あたしには！

と、いちいち目くじら立てても、しょうがないことはよくわかっているから。

そんな憤りを顔に出さずに振りかえった。

「なに？」

「遠藤ちゃんが呼んでる。真崎のことも一緒に」

「え？ 昼休みなのにい？」

「そんなこと言ったって、あたしだって頼まれたんだもん」

言うだけ言って、彼女は席について参考書を広げた。

文化祭が終わったばかりの進学校は後片付けが終わってしまうと、すぐに元通り。

実力テストが控えているから、気を抜いていられないのだ。

「マサキはどこ？」

「真崎は……わかんない、ごめん」

仕方なく教室を出て、真崎 英彰を探しに行く。

委員長のくせして、いつも雑用は里奈に押しつけて、ふらふらとどこかに消えてしまう。そのくせ、成績は常によろしくて。話せば気

さくなもんだから、委員長なんかには選ばれる。なのに「委員長」なんて呼ばれない。

彼を探するのは慣れたもんだ。晴れてる日は屋上、雨の日は図書館。で、なにやってるかといええ。寝てやがる。

今日の天気は晴れ。よって屋上。

案の定、いた。

気持よさそうに目を閉じて寝てる。

里奈は彼の枕もとに立って、首を傾げた。

「起きなさいよ。遠藤先生のお呼びだつてさ」

すると彼は目を閉じたまま、

「俺には用はないけど」

「あんたにはなくても向こうにあるんでしょ」

「担任が若くて美人とかいうんだつたら俺の気合も違っただけだな」

「バカ言つてないで、早く起きてよ」

英彰は片目を開いて、里奈を見上げた。

「そのおさげ、自分でやるの？」

「は？」

「いつもきちんと結んでるから」

里奈は肩をすくめた。

「副委員長だもん、服装検査で怒られるの嫌だから自分でやってる。

そんなこといいから、早く行くよ」

ブレザーの腕をひいたらようやく早く身体を起こした。

眠そうにあくびなんて噛み締め。

立ちあがると真崎英彰はでかい。ひよろつとでかい。

そしてブレザーの胸ポケットから取り出した眼鏡をかける。度なんて入っていないような、レンズの薄い縁なしの眼鏡。

そうすると端正な顔立ちに真面目さも加わるような気がする。

「野々村、遠ちゃん職員室か？」

1歩先を歩いていた英彰が、首だけ振りかえった。

「たぶん」

肩を並べて歩く。

聡明より、少しだけ背が高い。

どんなときも、どんな相手でも。

聡明と比べずにはいられないから、中毒だと思う。

「アンケート?」

「そうそう」

職員室で里奈と英彰は顔を見合わせた。

遠藤教諭は渋い顔でプリントの束を2人に渡した。

「俺はこーゆーの好きじゃないんだが」

2学年意識調査。

Q1・自宅での学習時間は何時間ですか?

Q2・塾には通っていますか?

Yes、NO形式ではなくて、自筆で回答するようになってる。

ざっと目を走らせて里奈は眉を寄せた。

Q20・感心のある異性はいますか。

17歳だよ?

いて当然じゃん。

そんなことを胸の中で呟いたら、答えるように英彰の声がした。

「こんなのやってどーすんですか?」

「最近17歳の犯罪が多発してるから、意識を調査するんだと」

「意識調査って……管理されるみたいでやだなあ、俺」

「そう考えるなよ。俺だってやりたくねえんだ。でも、それで誰か

のSOSがわかるかも知れねえからな」

「無記名なのに?」

「無記名でもだ」

英彰ははい、と頷いて、教室に戻るといった。

その後ろについて歩きながら、里奈は彼の背中に尋ねた。

「筆跡鑑定するのかな?」

「たぶんな。あつちはテストやらなんやらで生徒の字は知ってるからな。席順で回収すれば、まんますぐわかる」

「なんか嫌だな」

「けど、遠ちゃんの言うことも一理ある。SOSを言えない奴はたくさんいるはずだから」

里奈は視線を落とした。

確かに成績至上主義のこの学校では生徒の個性なんてどこ吹く風だし。

でも、17才だっているいろいろあるんだよ。

知ってほしいことも、知られたくないことも。

その日はちょうど家庭教師の日だったから、里奈は聡明の前でそのアンケートを広げて見せた。

聡明はどれどれと眺めて、困ったように笑った。

「家族との会話はありますか？ って、おい、この恋愛関係、妙に細かいな。感心のある異性はいますか。在校生ですか、他校生ですか……」

悪ガキ聡明はおもしろがって、ふむふむと眺めている。

「これコピー取りたい。貸してくれ、コンビニ行って来る」

「どして」

「見せたい奴がいるから」

「暇だね、聡明。誰に見せるの」

「研究室の連中と教授」

言うなり聡明は腰をあげて、里奈に言い放った。

「その間3やつとけ。制限時間は5分」

「5分で戻ってこられるわけ？」

「当然」

「アイス買って来て」

「太るぞ」

聡明はさっさと背中をむけて出ていってしまっ
なんつー家庭教師だ。

気になる異性はいますか？

実力テストの結果がぼちぼち戻り始めている。

今まで返ってきた教科のテスト用紙を聡明に差し出すと、彼は黙っ
てそれを眺める。そして、顔をあげたかと思うと手を伸ばしてきて、
里奈の頭をぐりぐりなせた。

「なによー」

「がんばったな。数学苦手なのによくやったよ」
誉められて、素直に喜べる性格ならどんなによかっただろう。

ここしばらくどんな小さなテストでも、テストと名のつくものには
手を抜いた事がない。手を抜くと聡明にはすぐにばれる。

このぐりぐりが、聡明の手のひらが欲しくて、本当にがんばってい
る。

私はがんばってるんだよ、聡明。

「聡明」

「センセって呼びな」

「聡明センセ」

「なんだよ」

「ガッコから帰ってくるとさあ、クリスマスのディスプレイ見かけ
るようになってきたよ。まだ11月になったばかりかだつてのにスゴ
イと思わない？」

「そー言えば、そうだな」

「デートする相手いんの？」

聡明はただでさえ細い目をさらに細くして、呆れたような視線。

「カンケーねえだろ、おまえさんには」

「いないんだ。その目じゃねー。細すぎるよねえ」

「俺の愛くるしい細い目をバカにすんな」

「どこが愛くるしいって？」

「この辺が、とくに」

と、黒目を指差してめいっぱいの真面目顔。

本当にあなたは24歳になるのかと尋ねたくなるほどに、ガキな反応をみせる時もある。

でも、聡明は里奈の知っている大人の中では気の利いているほうだ。にっこり笑って「はい」、というだけの生徒がいちばいい子だと言って憚らない教師とかより、里奈を納得させる英気がある。

どうして5年早く生まれなかつたんだろ。

そうすりゃ、こんな背伸びなんてしなくても聡明との距離は近いものになるのに。

年令だけでも、近づきたい。

でも、気持を悟られるのは絶対にいや。

難しいもんだ、我ながら。

成績順位表。別名長者番付。

実力テストのみ職員室横の掲示板に張り出される、各学年上位30位までの名前。

悪趣味といえは悪趣味。でも、競争社会の一端を表しているとも言えるのだ。

負けてたまるか17才。

「里奈、10位だ。スゴイね」

親友の根本奈津美ちゃんが嬉しそうにきゅんと愛らしく口許に手を当てて、もう片方の手で里奈の制服の袖を掴んで揺さぶった。

そんな事を言ってくれる彼女だって、23位。番付に名前を連ねて

いる。

がんばったのにまだあたしよりできのイヤツが9人もいる。

正直がっかり。

聡明はああ見えても頭がいいから、成績はかなりよかったんだろうな。

自分ではあまり成績の事を言わないけど、出身高校を訊いたら都内でも超がつく進学校だった。東大進学率？%つて、とにかく名門高校。

よく入れたなあとぼろつと言ったら、聡明はにやりと笑って、

「たいしたことねえよ、俺の母校なんだから」

なんていけしゃあしゃあと抜かしやがった。

ここ桐栄高校は、聡明の母校に入れなかった生徒が多く存在する高校だったりする。

聡明の在籍する大学を第一志望している生徒も多い。

「野々村、悪いな、今回も勝たせてもらった」

背後からにくつたらしい声があった。

「真崎くんは常に5番圈内ですから、私なんてとつても」

睨みながら振りかえると、真崎英彰がにやりと笑っている。

あんななんかより、聡明のほうが賢いんだがらね。

あたしの好きな人はあんななんかより、絶対に。

「真崎、どうやって勉強してるの？」

奈津美がはにかみながら尋ねると、英彰は軽く笑って、

「塾行ってるだけだよ、あとはフツー」

「あたしも真崎と同じ塾にしようかな。それだけで成績上がりそう。

里奈も一緒に行くこつよ」

おいおいおい。

里奈は苦笑いしながら、奈津美の額を軽く押した。

「そんな他力本願ではダメダメ」

掲示板の前の人だからから抜け、なんとなく3人で歩き出したら、英彰が里奈を見下ろしながら、

「野々村は塾に行っていないよな？」

「うん、家庭教師」

「美人？」

里奈は笑って、

「どうしてあなたはすぐそっちに結びつけるかな。男だもの、美人じゃない」

英彰は軽く目を見開いて、口許を歪めた。

「そうなんだ」

「大学院生なんだよね。わたしもテスト前に何回か里奈ちに行って一緒に勉強教えてもらった事あるけど、おもしろい人なの。すごくわかりやすく教えてくれるし」

「大学院生か……それはそれは意味ありげに英彰が呟く。

渡り廊下の向こうから、英彰を呼ぶ声がした。

顔をあげて彼は返事をする。

そして、里奈と奈津美から離れていった。

寂しさと熱っぽさを半分半分にした眼差しで、奈津美は真崎の背中を見送る。

その横顔を見ながら、里奈は溜息をついた。

半年前に、奈津美が言った言葉がリフレインしたから。

「あたし、真崎のこと好きなの」

真崎英彰はもてるよ。

上級生から下級生まで、満遍なくおモテになる。

委員長&副委員長コンビでいるっただけで、派手な一年に睨まれたりいろいろしてるんだよ、私は。

もてるヤツが好きな相手だと辛いものがあるよね。
聡明はどうなんだろっ。

あの目の細さでは如何なものかと思う。
でも、聡明は不思議なオーラがあるから。

聡明の身近にいる女を親しい順番に並べていったら、私は何番目なんだろっ。

……圏外じゃない事を祈るばかりでございます……。

日曜日というほぼ毎週、里奈は図書館に出かけている。
必死に勉強するというわけではなくて、単にそっうと出かけやすいため。

と、もうひとつ理由があったりするし。

薄めの化粧をする。

鏡をみていたら、はじめて聡明に会ったときを思い出した。
親が勝手に決めた家庭教師なんて嫌だったから、わざと白い口紅をつけて爪も白くしていた。

馬鹿げた反抗だったんだけど。

聡明は案の定、

「家にいるときは化粧落とした方がいいよ」
と言ったので、しらっと、

「素颜です」

と答えてやった。

するとすると、聡明は、

「そんな毛穴のない素颜があるか」

と言つて、

「俺はピンク系のほうが好みだ。唇を白くしてると大福一気食いしたみたいだからやめとけ」

まさかそんな事を言われると思っていなかったもので、驚いた。大福一気食いには少々ショックだったし。

それからピンク系のリップとかルージュが増えた。

化粧をして歩いていると、大学生と間違えられる事がある。

図書館に行くには里奈の家から、地下鉄を乗り継いで10分ほど。その途中でナンパされたりすることは珍しい事ではない。

今時珍しくないだろう、高校生でも化粧してるのなんてさ。

市の図書館の学習室に足を踏み入れると異様な空間だ。

物音厳禁、それぞれがわが道を行っているのに、妙な連帯感がある。静かにしろ、みたいな。

適当にあいている席を探して参考書を置いたとき、向かいの席で立ちあがる気配。つられて顔をあげて、里奈は目を見開いた。真崎英彰だった。

彼も勉強していたようで、参考書が開いたままになっている。

彼は目元だけで笑って、里奈に歩み寄ってきた。

そして、あたりを気にしながら、こそつと、

「よっ」

里奈は彼を見上げて、軽く口許を笑わせた。

知り合いに偶然会えるというのはなぜか嬉しかったりする。

「真面目だな、野々村は」

せつかくの日曜日なのに。

里奈は椅子に腰をおろしながら、頭を振ってみせた。

あんたこそ。

英彰が席に戻って、2人はそれぞれの作業に没頭。

里奈はしばらく得意の英語の長文読解に取り組んでいた。

一時間ほどすぎて、またまた肩を叩かれた。

顔をあげると英彰が親指で時計を指して、そして、外を指す。

正午を過ぎていた。

里奈は腕を伸ばして軽く伸びをした。

英彰が里奈の置いたペンを掴んで、さらさらとノートに書いた。

飯、行かないか？

高校生のお昼なんてハンバーガーで充分さ。

里奈はコーヒーを飲みながら、ぼんやり呟いた。

「あー、生き返る。コーヒー美味しい」

英彰はなんだそりやと笑って、椅子の背にもたれなおした。

そして、斜めから里奈を眺め始めた。

その視線が気になって、里奈は軽く睨んで返した。

「なに」

「いや、雰囲気違うなと思ってさ」

「TPO。学校では学校にあったカツコしてるだけ。本当はこっちの方が好き」

そっぴい英彰もジーンズにパーカーというラフさ。

背が高いせいか、私服は大人びて見えた。

「化粧慣れてるんだ」

「勉強中……ハンバーガーやめておけばよかった。口紅が落ちる」

ぱっくり噛みつくくと、口紅のあとがパンにつく。
ナプキンを一枚とって口紅に当てて、それを落とす。

その様子を英彰は静かに眺めるから、居心地が悪くなってきた。

「なに」

「女は化けるね」

里奈は笑ってナプキンを小さくたたんだ。

食事を終えて、図書館への道をなんとなくぶらぶら歩いた。

秋晴れが広がる空の下、少しだけ冷たい風が吹く。

英彰が前髪をはらうようにかきあげて、目を細めた。

「この近くに俺の第一志望があるんだよな」

呟く声に、里奈の心臓が跳ねあがった。

この近くにある大学は言わずもがな、都村聡明さん、在学中。

だから、図書館で時間をつぶしているのだ、私ってけなげ。

会えなくても少しでも近くにいたくて。

何度も入ってみようかと思った。

でも、勇気がなくて、ダメで。なんども素通りした。

そんな里奈の胸のうちなんて知らない英彰はのんきに、

「入っちゃヤバイかな、日曜だと目立つかな」

なんていう。

里奈は彼の姿を上から下まで眺めた。

そして、言った。

「大丈夫。あんたも大学生に見える。一緒に行ってあげるよ、もうしょうがないなあ」

英彰はノリノリな里奈の様子に怪訝顔。

「おまえもここ志望してんの？」

と、彼が問うほどに。

そんな彼の腕をひいて、大学の構内に足を踏み入れる。かなりどきどきした。

日曜日では聡明はいないだろうけど、聡明が通っているというだけで、その日常に触れたようで、嬉しい。

「なに学部志望してるの？」

「理工学部」

「建築じゃないの？」

「なんで建築なんだよ。そもそも建築も工学部だっつの」

「いいから、あ、案内があるよ、行ってみよう」

構内の簡単な地図があった。

里奈は大学院の研究室を探した。

西端の校舎の3階らしい。

行ってみたいような気もするが、それはさすがに大胆すぎる。

「ちよつと構内歩いてみようか」

「ああ」

「生協があるよ。行ってみよ」

「学生証ないと買い物できないんじゃないのか？」

「えー？そんなことないよ」

学生生協に行つて、二人はあちこち見まわしながら歩いた。

「スゴイね、大学の中にスーパーがあるみたい」

「ここの大学ブランドの文具があるんだ、へえー」

英彰と並んで陳列された棚を眺めていたら、背後から声をかけられた。

「……がきんちよ娘じゃねえのか、おまえは？」

この時期、聡明は研究室に住んでいるような状態だったので、構内にいたわけだ。

ついでに研究室仲間と購買部でお菓子なんて買っていたりして。

そこで、どこかで見たような女の子をみたので、ちょっと回れ右をして、尾行してみたりした。そんな彼のあとを恥ずかしそうに相棒の浜崎佳乃がついて行く。

男と並んで仲良くしているが、まちがいない、教え子の生意気がきんちよ娘だ。

なんだってまた、こんなところで。

「……がきんちよ娘じゃねえのか、おまえは？」

相手は振りかえって、跳びあがらんばかり。

目を見開いて悲鳴をあげる寸前。

聡明は隣に立っている賢そうな眼鏡の青年を見る。

そして、腕をくんでにやりと笑った。

「彼氏かよ？」

「ちつちがうつ」

「隠すなよ」 ママとパパには黙っててやるから

「聡明 ！！」

「センセって呼べ」

「誰があんたなんてっ」

顔を真っ赤にして声を張り上げる里奈を英彰は不思議そうに眺める。

そして、聡明は腕をくんで、あたりまえの事を尋ねてみた。

「なにしんでんだ、コンナトコで」

「フーン、うち第一志望なのか」

聡明はにっこり笑って英彰の肩をポンポンと叩いた。

「これもなにかの縁だ、案内してやるよ」

眼鏡の縁をあげながら、英彰はありがとうございます、と素直に頭を下げる。

この淡々としてるあたり、真崎英彰だ。

聡明はもともと気さくな人柄なので、こういうことをさらりとやっ
てのける。

会えたのは嬉しいけれど、なんか嫌な状況。

最初は白衣姿の聡明をはじめ見て興奮したりもしたけれど、彼氏がいるなんて思われたくない。

どうせ思うなら、もっと残念そうな顔をして欲しい。

やきもちくらは、そう、やきもちくらは見せてほしい。

でも、聡明はぜんぜん全くと言っていいほど、そんな様子はなくて。

里奈はふと、当然のように聡明の隣を歩く白衣の女性を見た。

浜崎佳乃さん。

清潔そうで、賢そうで、優しそう。

目が合うと彼女はふわりと微笑んだ。

里奈は目をそらしてしまう。

相手の戸惑いは伝わってくるけれど、いい顔なんてできなかった。がきんちよと聡明に言われても仕方ない。

自分でそれを痛感して、里奈はますます落ちこんでしまう。

結局その日の夕食を聡明にご馳走してもらうことになった。

学校の近くのカレー専門店。

聡明と佳乃コンビの会話ときたら、絶妙なポケッツコミ漫才。

聡明のつまらないギャグには佳乃が如才なく突っ込んで、佳乃の天然ボケを聡明が容赦なくと突く。

美味しいカレーだったような気がするけどイマイチ食欲がなかった里奈を、英彰が頬杖をついて眺めている。

そして、ポツリといった。

「残すの？」

「は？」

「半分以上残しそうな食い方してるから。昼間の勢いはどこいった？」

ハンバーガーはばくばく食べましたけど、ええ、そりゃもう、2つくらい。

聡明がいるところでは、胸がいつぱいで食欲は減退してしまうし。なんだか、見せつけられているようで。

本当ならば逃げ出してしまいたいくらい、なぜか惨めだったりするの。

おい、真崎英彰。

あんたはそういう話をするか。

里奈は仏頂面でスプーンを置いて言った。

「昼間食べすぎたみたい」

「いつも結構食ってんじゃん」

「なにがいいたいわけ？」

「おまえ、2限のあとで、パン食ってたり……いつ」

余計な事言うな、バカ！

テーブルの下の英彰のすねをかかと思いつき蹴ってやる。

英彰はかなり痛かったようで、しばしうつむきながら、上目遣いに里奈を睨んでいた。

そんな2人のやりとりを聡明と佳乃は、

「なんか初々しい……いいなあ」

「佳乃、彼氏作れよ。いない歴長すぎると眉毛が繋がるらしいぞ」

「どこからそういう発想が……眉毛なんて繋がってもいいわよ、剃ればいいんだし、抜けばいいんだし」

「剃る。抜く。女は大変ですねえ、いろいろと」

「男だつて毎日髭剃りしなきゃじゃない？」

「俺、髭伸ばそうかな」

「あたし髭のある男のひと苦手」

「おまえ胸毛もダメだつて言ってたよな」

「毛深いのだめなんだよねえ……。だから知り合うのも大変。胸を気軽に見せてくださいって確かめるわけにいかないから。それに禿げるって言っし」

「安心しろ、俺はない。親父もない。お袋さんにもない」

「誰も訊いちゃいないって」

「そーか」

そんなアホ話に耳を傾けていたら、不意に英彰が里奈の前から皿を取り上げた。

白いままのライスが半分以上きれいなまま残っている。

「食っていい？」

里奈はぽかんとして相手を見つめた。

「だっ、だめ、食べかけだから」

「ほとんど食ってないだろ。もううよ」

そして、別の器にこれまた半分以上残ったままのカレーもとられてしまった。

里奈は頬を染めて、うつむくしかないってのに、英彰は平然としていて。

なんでそんな顔できるのよっていうくらいに平然として食べ始めるから。

里奈は尋ねた。

「あんた、そんなにお腹へってたの？」

「まーな」

適当な返事。

それを眺めながら、聡明が佳乃に言う。

「いいねえ」

「ごめんね、もうすっかり平らげちゃったよ、あたし」

聡明は佳乃の頭を軽く叩いた。

「誰がカレーの話してんだよ、タコ」

「違うの？」

「おまえに彼氏ができないのはその辺だな」

「うるっさいわね、あたしの恋人はペニシリウムと、ポテトデチロースと顕微鏡のひろみくんよ。3人もいるんだからほつといて。

あっ、パソコンのランちゃんもいる」

「寂しい女だな、おまえ」

英彰はさっさと食べ終えて、澄ました顔で水なんて飲んで。

「野々村のカレー甘すぎ」
なんてほざいた。

間接ちゅうはご飯でもありですか？

「わたしも便乗していいの？」

佳乃が聡明の肩を叩く。財布を開いていた聡明は何気なくその手をつかむ。そのさりげなさに里奈の胸が痛んだ。ちくりと。

聡明は掴んだ彼女の手のひらをかえして、笑顔で一万円札を握らせた。

「コレを越えたら、助けてくれ」

「はいはい」

佳乃が会計をしているあいだ、聡明の携帯がなった。それを取り出して聡明は一瞬表情を曇らせる。

そして、出る事もせずに切ってしまった。

佳乃が戻ってきて、聡明におつりを手渡した。

そして、時計を眺めながら、

「今日は研究室には戻れないと思うよ、日曜だし」

無造作に小銭をしまいながら、聡明は曖昧な返事をする。

そして思いついたように、

「佳乃、真崎君たち駅に送ったら、飲みにいこうぜ」

佳乃は聡明の額を指で弾いた。

「也美さんのところに帰れ。待ってるよ絶対」

嫌なことをきいたような気がする。

也美さんって、誰だろう。

その名前を言われたときの聡明は、らしくもなく不機嫌な顔をして、視線を落したりしているし。

「也美さんって誰？」

唇から呟いていた言葉、無意識に。

聡明が困ったように笑って、里奈の頭に手を置いた。

なだめるように、ポンポンと叩いたりして。

「俺のねーちゃん」

佳乃が溜息をついた。

地下鉄で揺られながら、里奈はぼんやりと景色のない窓の外を眺めていた。

英彰は里奈の隣でドアに寄りかかっている。

ジーンズのポケットに両手をつ突っ込んで、背中を丸めて。

「おまえってわかりやすいやつ」

「はあ？」

「わかりやすすぎて、笑いそうになった」

言葉にトゲを感じて、むっとした。もともと気分はよくないから、まっすぐに睨みつけたら、さらに眼鏡の奥からひややかーに睨まれた。

「なにそれ」

「俺のことダシにしたろ」

いきなり切りこまれて絶句。

英彰はなぜか怒っている様子で、

「確かにあの人はカツコイイよ。やる事に無駄がなくて。頭が切れてさ。それを鼻にかけてないし。あの人から見たらおまえなんかガキすぎ」

「なっ……にを言うかな、バカ。ガキはあんたじゃない」

勢いで言っただけなのに、英彰はなぜかカツと顔を赤くして、口を閉ざしてしまった。

相手が黙ってしまったので、気まずいままの空気に包まれる。

そのまま降りる駅に着いて、一言も口を聞かずに里奈は地下鉄を降りた。

英彰は2つ先の駅で降りる。

ドアが閉まって、なんとなく顔をあげたら、英彰がドア越しに見ていた。

動き出す直前、視線が絡んだ一瞬。

胸がきゅっといったような気がした。

思わず手で押さえかけて、里奈は眉をひそめた。

英彰が舌を出していたので。

「あなたね　！！」

走り出した電車を2・3歩追いかけて、あつかんべえー！！と返してやった。

あつけにとられたように英彰はキョトンとして、それから笑い出した。

そのあとの顔がどんな顔だったかは見えなかった。

「奈津美は間違ってる。あんなやつ、どうして好きになっちゃうんだ！　ガキじゃん、ガキ！！」

ちょっと成績がよくて、顔がいいだけの、ガキじゃん。でも、走るのも速かったよね、そういえばさ。

「ふくいんちよ、マサキとセットで呼ばれています」

放課後、掃除を終えたばかりの教室で、職員室から返ってきたばかりの日直が、里奈に声をかけた。

やれやれまたかい、と里奈はもっていたモップの柄のてっぺんに顎をのせた。

地下鉄であつかんべえ事件から、2週間。

なんだかんだと英彰とはセツトなものだから、ぎこちないままにもそれなりに言葉は交わしていた。必要不可欠な単語だけは。

気がつけば時はクリスマスシーズン。

女の子の話題は彼氏に何をあげるとかあげないとか。

そんなときに思い出すのは当然聡明のことなんだけど。

聡明は手編みのセーターは怖いというし。

それに下手にプレゼントなんてあげたら、気持がバレそうダメ。

そんなこんなで、実につまらないクリスマスだったりする。

で、遠藤教諭のお呼びだ。

彼は委員長と副委員長をセツトで呼び出すのが好きだ。

まったく、また英彰を探さなければならぬ。

英彰とよく一緒にいるグループの男の子達が、里奈を呼びとめた。

「ふくいんちよー、マサキ、さつき、3年の畠山さんに呼び出しくらってバスケット部の部室に行った」

呼び出しで部室？

「ぶっそうだね、先輩に呼び出されるなんて」

「英彰の部活の先輩だから、引継ぎとかじゃねえの？ 仲いいしあの二人」

「そうなんだ」

「急ぎなら部室」

「ありがと」

言われるままに運動部の部室方面に足を向けた。

バスケット部の部室は体育館の東側にある。

突然ボタン！！勢いよくドアが開く音がして、里奈は反射的に跳びあがった。

英彰が勢いよく飛び出してきたからだ。

その顔はいつもの飄々としたところは微塵もなく、切迫、そして、

蒼白そのもの。ぼかんとしている里奈に気がついて、彼は再びギョ

ツとしたらしい。そして、なにを思ったのか、いきなり里奈の手を

つかんでそのまま走り続ける。

「なっ、なに?!」

「いいから来いよ!」

「はあ?! ちょっとわけわかんないんだけど!」

「わかんなくていいよ!」

英彰が足を止めたのは体育館の隣の簡易庭園。

植えこみに隠れるように、英彰は身を潜めて、そっとあたりをうかがった。

一方の里奈はゼーゼー言いながら里奈はその場へたり込んでいる。

「なんなのよ、あんたは」

英彰の返事がないので、怪訝に思って彼のほうを見た。

英彰は膝を抱えて、口許を押さえて、呆然自失の表情。

視線は一点あるのに、定まっていないような。

こんな間の抜けたこいつの顔を見たのははじめてかもしれない、と里奈は思う。

よく見れば随分とよれた格好している。

ネクタイは曲がっているし、ワイシャツのいちばん上があいているし。

ボタンがとんでるよ、おいおい。それに顔に何か足りないと思ったら、眼鏡はないし。

まさか、殴られたとか、ケンカ売られたとか?

「ねえ、マサキ、ケンカでもしたの?」

英彰はちがうと首を横に振るだけ。

「ちょっとヘンだよ、どうしたの?」

「何でもないよ」

吐き捨てるように言って、それから軽く睨まれた。

「言うなよな」

脅かしの入ってるような声色に里奈は眉を寄せた。

「今のこと?」

「誰にも言つなよな」

「言わないけど……」

何があつたわけ、一体？

納得できないままに、それでもしびしび頷いたら、低い声がした。

「英彰　……」

呼ばれているのか、探されているのか。

英彰はギョツとしたように身をすくめて、茂みに隠れようとする。

「呼ばれてるよ、マサキ。あんたのことじゃないの？」

「バカ！」

押し殺した声で言われたかと思うと、腕を掴まれて、頭を押されてそのままスゴイ力で芝生の上に押しつけられた。

「なっ！！にす……！！！」

「頼むから、黙ってて、マジで」

英彰は里奈の頭を芝生に押しつけたまま、そつとあたりをうかがう。

次の瞬間、またまた、同じ声で、

「英彰！！！」

弾かれたように英彰は頭を引つ込めた。

押さえつけられている力が弱まった。

なんだつてあんたは17歳の乙女の顔面を芝生に押しつけるんだ、ボケ！！

里奈は怒りに任せて立ち上がるうとしたものの。

英彰はアホ！！と呟き、里奈の身体を抱えこむ。そして、そのまま芝に転がった。里奈は彼の胸に飛び込むように倒れこみ、今度は鼻を強打。

「いつつ……！！！」

悲鳴をあげかけたら、手のひらで口を塞がれるわ。

思わず涙目。

英彰を睨みたいのだが、がちり抱きかかえられていて、身動きは取れないし。

当の英彰は息を詰めているし。

考えてみれば、スゴイ体勢ではないか？

植えこみの影で、男子生徒に芝生の上で抱かかえられている。さすがすぎる。

混乱しすぎて、里奈は何度目かの呆然。

どれくらいたつたあとだろう。

英彰を探す声がしなくなつて、彼がほつと息をついたのは。身体中の力を弛緩させて、英彰は芝の上に頭を投げ出した。

「あんつたね ！！なにすんのよ！」

怒鳴りつけながら英彰の上から降りようとして、腕を掴まれる。

もう片方の腕を目の上に乗せたまま英彰は、呟いた。

「人生いろいろあるもんだなー17にして悟つた俺は」

「なにいつてんの、あんたは」

「最悪と言つてもいい日だ」

「はなしなさいつてば、マサキ、ヘンだよ、何があつたの」

掴まれた腕をブンブン振りながら尋ねたら、いきなり身体を起こして、英彰は膝を抱えこんだ。

「俺、今、かなり精神不安定」

「だから？」

里奈の視線は掴まれたままの腕に注がれている。

「暴走」

そんな呟きが耳に届いたとき、英彰の頬が傾いた。

掴まれたままの腕が引かれた。

今度は里奈がダッシュしている。

体育館裏を部室から飛び出してきた英彰と同じような顔で。英彰は、突き飛ばされて、芝生の上。

野々村さん、なにがあったのですか？

<2> 大嫌いつて本当ですか？

「勢いねえな、がきんちよ」

ぼかんと丸めた参考書で頭を殴られた。

里奈は何度かの溜息をついて、そのままノートの上につ伏した。

「聡明」

「センセって呼べ」

「せんせえ」

「おっ、素直だな、どした？」

「男って、衝動的すぎない？」

聡明がきよとんとした。

「そんなの今更。そんなもんだろ、男なんか」

あつさり言われて里奈は頭を抱えこんだ。

そんなもんなのか。

そんな……もんなのか？！

「でも、俺からすれば女の方が衝動的だけだな。今だっておまえはそんなこといきなり訊くし」

聡明は机に手を突いて身体を傾けている。

もう片方の手にある参考書で顔を半分隠しながら、里奈を見下ろす。

「マジでどした？」

心配してくれてる？

そんな声出さないでよ、お願いだから。

頭を少し傾ければ、聡明の胸にコツンとあたるはず。

……寄りかかっちゃいたい。

でもできない。

私は言葉でしか甘えられない。

「センセえ、そんじゃ、も1個質問」

「はい、野々村さん」

「衝動的にキスしちゃう時は、どういう時ですか？ その衝動的ということになる、相手はどんな人ですか？ 誰でもいいんですか？」

らしくもなく聡明が言葉を失っている。

なにを連想したのか、この大学院生は真面目な顔をして、里奈の頭を突いた。

「わからないって逃げたい質問なんだけど、ダメか？」

「だめ、教えてよ。センセじゃない」

「こーゆー時ばっか、センセかよ」

上目遣いで言ってみた。

聡明は軽くうなづいて机から手を離れた。

ぶつぶつ言いながら聡明はつい、と机から離れる。

そして、部屋の隅にある2人掛けのソファに腰をおろした。

里奈は椅子ごとくると振りかえって、聡明を見る。そして、答えを待つ。

ハートのクッションを抱えこんで、聡明は冴えない顔をして、

「そういう場合は、男という分類では説明しきれないよ」

「傾向として」

「そんなん……は、ごいません」

「それなら、聡明なら？」

聡明はそつと目を伏せて、

「……女はそれをされるとどう思う？」

質問された気がする。

聡明は尋ねることはあっても、質問することはなかった。信じられずに里奈はまじまじと聡明を見た。

「惚れた相手でもない、やっぱ、泣くのかな」

泣く？

泣かなかった。

ただ、驚いて、突き飛ばして、逃げてきた。

頭にきて、それから、訳がわからなくて困って、そして、最初のキスだったってこと思い出したら……悲しかった。

キスなんてするであろう時は好きな人でありたい。

でも、それってなんて贅沢なことなんだろう。

聡明の細い目はどこを見ているのやら。

どこことなく、寂しそうな、遠い目。

ねえ、どうしてそんな顔をするの。

聡明にそんな顔をさせている人は誰なの。

翌日、登校して席につくと、英彰が歩み寄ってきた。

顔に眼鏡がない。

「野々村、あのさ」

里奈は彼を冷めた目でちらりと一瞥して、それから避けるように席をたった。

英彰が傷ついた目をしている。

眼鏡がない分、それはストレートに伝わってきた。

あんなに薄いレンズ一枚で、どうしてこんなに感じ方が違うのだろう。

背中を見られていることを感じながら、里奈は教室を出た。

なんでキスなんてしたのよ。

その日は放課後まで背中が落ちつかなかった。

振りかえると英彰と目が合う確率が異常なほど高くて。

奈津美がトコトコと寄って来て、

「帰ろう、里奈」

「うん、帰ろう、帰ろう」

荷物をまとめてさっさと席を立つ。

「野々村」

低いのに通る声でした。

奈津美が振りかえる。

そして里奈の上着を引っ張った。

「ねえ、マサキが呼んでるよ」

怪訝そうにのぞき込んで来る。あからさまに無視をしているから、

不自然といえば不自然すぎる。

「野々村」

もう1度、声でした。

里奈は鞆を掴んで歩き出した。

「里奈ってば、どうしたの？」

慌てて奈津美がついてくる。

教室を出て、奈津美に腕を掴まれた瞬間、里奈の目の前に体格のいい男子生徒がぬっと現れた。学年章が3年生。

里奈と奈津美はぎょっとして足を止めた。なんで2年の教室に3年生が？！

彼の視線は里奈たちを素通りして別のところに。それをなんとなく追っていったら英彰がいた。

英彰は里奈を追いかけて教室を出てきて、場違いな3年生の姿に驚

いたように目を見ひらいた。

それでも、その驚きはすぐに消えた。

「うっす」

視線を落としながら、英彰はそっけなく彼の前を素通りして行く。

「英彰！」

彼が振りかえって呼びとめても英彰は振りかえらず、足早に廊下を歩き、終いには走り出していた。

「……」

里奈と奈津美が顔を見合わせると、3年生の彼は里奈を見て、

「野々村里奈？」

とぶつきらばうに尋ねてきた。

「そうですね」

奈津美にちらりと視線を向けて、あらためて里奈に戻す。

「コレから付き合ってくれ。時間あるか？」

まじまじと見上げると、結構いい男で。

そして、思い出した。

「畠山先輩ですか？」

うん、と彼は頷いて、突然破顔した。

笑うとちよつと可愛いような、そんな人だった。

奈津美を伺うと、いいよ、と目配せしてきたので、里奈は頷いた。

「構いません」

英彰も背が高いけれど、畠山は背の高さはもちろん肩幅がある。なので英彰よりも存在感があるというか。

バスケット部のキャプテンとか、言ってたなあ。

目が細い。そのせいか笑い方が聡明に似ているような気がする。

「地下鉄？」

「はい」

「それじゃ俺と同じだな。おごるからさ、なんか食わない？」

「はあ……いいですけど」

「なにがいい？」

「あんまりおなか減ってないので……軽いものがいいです。でも、いいんですか？ そんなに親しくもない後輩に」

「俺はおまえのこと前から知ってるよ」

あっさりと言われて、里奈は彼を見上げた。

「ヘンな意味じゃないから。英彰とコンビでよく歩いているから自然と」

英彰ねえ……。

「コーヒー飲もう。寒い」

コーヒーチェーン店を指差した。

笑った顔は結構いいなあ。

畠山はサンドイッチをぱくつとやって、コーヒーカップを手にする。じつと見ていたら、目があつて軽く笑われた。

やっぱり、笑うといいなあ。

なんだか嬉しくなってきた。

ミルクティーのカップを両手で包むように持って、しばらく畠山の顔を鑑賞していたら、ますます笑われた。

「なんだよ、なんかついてる？」

「いえ、すみません」

恐縮して身をすくめると、今度は畠山の方が慌てて、

「いやいいんだけど。なんか、すげえ楽しそうに俺のこと見るからなんなんかなあつて……ごめんな、さっさと本題に入れてなあ？」

言いながら、彼はコートのポケットから眼鏡を出した。

英彰の眼鏡だ。

それをすつと差し出されて、

「悪いけど、英彰に返してくれないかな」

「えっ？」

「ないと困ると思うんだ、あいつ。部の後輩には頼めないんだ、頼まれてよ」

現在、顔も見たくない相手だが。

眼鏡を返すくらいなら、まあ、いいだろう。

奈津美にでも頼めばいい。

「はい、わかりました」

受けとつて、里奈は眼鏡をハンカチでくるんだ。

その仕草に畠山が感心したように、

「女の子なんだな、俺、そんなの思いつかなかった」

「はあ……」

あの部屋だよねえ、これあいつが落としたの。

何があつたんだろう。

ちらつと思つて、打ち消した。

あいつのことなんて、考えるだけでもムカツク。

「頼まれていでもう一つ頼まれてよ」

「何でしよう？」

「卒業までのあいだ、俺と一緒に帰ってくんないかな。さっきのちっちゃい女の子もいっしょでいいからさ」

へっ？

キョトンとして畠山を見ると、どうも照れくさそうに視線を落としながら、

「なんつーか、ちょっとあの、もうすぐ卒業だし、少しくらいコーコーサーっばいことしたいっていうか……はっきりいっちゃうと、うるせーんだ、女どもが」

「オンナドモと、申されますと……」

「付き合ってくれたの、なんだのとうるさい。受験とかで俺イッパイイッパイだから、面倒なの嫌なんだ。だから、なんつーか、一緒に帰る後輩でもいれば違うかなあ」と

スゴイ話だ。

それは、彼女のふりをしろということではないか？
ぞっとした。

うるさいほどによってくる女どもとやらが、どんな目を向けてくるか。

それを考えただけで空恐ろしい。

「あの、先輩、あたし、怖いです、その先輩のファンが」

畠山はうーん、とうなって、あっさりと言った。

「守るよ、俺が」

守るよかあー

言われて、嫌な気はしない言葉だった。

それに笑うと聡明に似ている、結構話しやすい先輩だし。

不思議なことに畠山と話したことで、気分が軽くなっていたし。

その次の日、英彰に自分から歩みよって、声をかけた。

机に突っ伏して寝ていた英彰がバツと顔をあげた。昨日と様子の違いすぎる里奈の愛想の良さに、ぽかんとしている。

「これ、頼まれたからね、ちゃんと渡したからね」

ハンカチで包んだ眼鏡を取り出して英彰に差し出した。

それを見て、英彰は眉をひそめた。

「誰から？」

「畠山先輩に頼まれた。いい人だね、あの人」

それだけ言っただけで背を向けかけたら、英彰は嫌にこだわって、

「なんで？ なんでおまえが」

「いつもあんたとセットでいるからだって」

英彰は眼鏡を制服の胸ポケットに無造作に突っ込んだ。

かけるつもりはないらしい。

「……この間のなんだけど」

口籠もる様子に里奈は英彰の言わんとしていることを察して、首をふった。

「その話はしたくない。謝っても欲しくない」
冷たかったかな、と少しだけ罪悪感。

英彰はまた、一瞬傷ついたような目をしたし。
でも、ホンネだった。

目立つことになった。

放課後になると、畠山が教室まで迎えにくる。

奈津美に事情を話したら、かなり驚かれて、なぜか、いいなあー、を連呼された。

「いいなあー奈津美も一緒に帰ってくれとか言われてみたいな」

奈津美は人見知りするものの、基本は能天気にかけているオンナノコだから、慣れれば畠山ともためらうことなく話しをする。

でも、畠山はこの学校では比較的有名人だから。

教室まで迎えにこられると、目立ちすぎる。図体でかいし。

「先輩、帰るのはいいですけど、教室までくるのは目立ちすぎです

よ」

「そっかあ？」

笑う。あー、その笑った顔。なんでも許せる。

聡明に言われているみたいだ。

聡明が毎日教室まで迎えに来る。

守るよ俺が、なんて言われちゃう?!

……鼻血でもふきそつな妄想。

アホです、私は。

そんなことが3日続いて、校内でまことしやかに噂されるようになって。

遠藤教諭に呼び出された。

英彰とはセツトではなく、里奈と奈津美だった。

遠藤教諭は渋い顔をしながら、

「誰と付き合おうと勝手だが、あまり派手にやるな。畠山のクラス担任からちくりとやられた。相手は受験を控えた3年なんだから」
ここで反論しても始まらない。

遠藤教諭も言いたくなさそうで、なんだか冴えないし。

「せんせ、違うよ、頼まれただけなんだから」

「頼まれた？」

奈津美の言葉に遠藤教諭は目を見開いた。

「畠山先輩にそうしてくれって」

「なんでまた……と、訊くのも野暮だな。まー、深くは訊かないから、高校生らしいすがすがしい男女交際をしてくれ」

職員室を出て、奈津美がぼつりと言った。

「なんか嫌だね。付き合うのってそんなにいやらしいことかな」
いやらしい。

なんか、聞いたほうが照れちゃう言葉だな。

里奈は溜息をついた。

「えんちゃん、どっちと付き合ってるかもきかなかったから、ホントに私たちにああいうこと言うの嫌だったんだと思うよ。でも、大人には建前ってもんもあるから」

「そんなのわたしたちにもあるのにな」

「そうだよね」

「ごめん、奈津美まで巻き込んで」

「いいよお、畠山先輩カッコイイし。気にしないで」

その日の放課後、畠山が謝ってきた。
相談して教室に迎えにきてもらうことをやめて、昇降口で待ち合わせることにした。

奈津美が電車を一番最初に降りる。

次が畠山で、次が里奈。

二人だけになって、畠山が言った。

「野々村はクリスマスはどうする？」

「クリスマスはたぶん親とです」

「親……か。俺もそうだな。いや、予備校だな」

小さな笑いを含んだ言葉に里奈は微笑み返した。

「ラストスパートですよ。センター入試」

「雑念飛ばしてる場合じゃないんだけどな」

「ざつねんですか？」

「うん」

言いながら、畠山は視線を移す。

隣の車両に。

里奈はその視線を追った。

何枚ものガラス窓の向こうに英彰がいた。

ドアよりかかってコートのポケットに両手を入れて、こちらを見ていた。

驚いた。

里奈の目が見開かれた瞬間、英彰は目をそらしてしまう。

畠山が呟いた。

「ほんとに、雑念は払わないとダメなんだよな」

電車が停まって畠山が降りて、里奈に笑いかけた。

「おまえはいい子だね」

「え？ なんですか、先輩？」

ドアが閉まる。駅の喧騒にかき消された言葉。

ドアの向こうから畠山が手を振る。
電車が動き出した。

里奈は溜息をついてドアに寄りかかった。
英彰が隣の車両から歩いてくるのが見えた。
歩いてどこかにいってしまおうかと思っただけで、それもあからさまなようで、そのまま動かないでいたら、彼は里奈の前で足を止めた。

「よ」

上目遣いで彼をみあげて、里奈はそつと視線をそらした。
まだ口をきける気分ではなくて。

なんでこんなにしつこいほどにこだわっているかというところ、里奈にとってキスは……最初のキスは単純なものではなかったから。大切なもので、それを盗られたから。

彼の口許に自然に目がいきそうになる。

鼓動が強くなって、苦しくなる。そして、すごく嫌な気分になる。
ときどきするのに、泣きたい。

どこかに行つてよ、ここからいなくなつてよ。

「なんで、こんなことしてるの」

おだやかな声がした。

「先輩となんでこんなことしてるの？」

里奈が答えの代わりに横を向くと、英彰はさらに言った。

「怒ってるのはわかってる。でも、話聞けよ」

「……」

「聞けよ」

「……」

「聞けつて!!」

語気強い声に里奈は顔をあげた。

「嫌。アンタなんて顔も見たくない」

「俺だつてそうだよ。でも、おまえがいるから視界に入ってくるんだよ。俺の方こそ嫌なんだ。嫌がらせならもう充分きいたよ。だから」

「もうやめろよ」

意味不明な言葉だった。

里奈は言った。

「どうしてそんなことあんたが言うの。先輩とは話してて楽しいし、楽しいよ、一緒に下校するの。あんたには関係ないと思う」

「カンケーねえなら、黙ってるよ、バカ」

らしくもなく乱暴に言い捨てる。そんな英彰の言葉を聞いたことがなかったので多少の驚きをこめて見つめた。わずかに首を傾げて英彰はついと視線を遠くする。

もうすぐ駅になる。里奈の降りる駅になる。

そして、電車が停まって、中途半端な会話が終わろうとして。

里奈は電車を降りて、絶句した。

英彰も降りてしまったから。

「あんたの駅、まだ先じゃない」

「話、終わってないから」

「もうする話なんてないよ!」

電車が動く。その激しい音に言葉が消されてしまう。

だから、声の調子を強くする。

「あるんだよ!! 俺には!」

「私にはないよ!」

「なくてもきけよ!」

「嫌だつてば!」

通りすぎた電車の音が小さくなり、二人の声がホームに響いた。

その残響。

呼ぶのは羞恥心。

まわりに人がいて、何事? というように視線を集めてきたから。

里奈は唇を軽くかんで背を向ける。

当然のように英彰もついてきて、里奈の肩を掴んだ。

「悪かった。ごめん」

その言葉に里奈は足を止めた。

鼻がつんとする。唇がわずかに震えて、目が霞んでしまう。
だめだ、押さえられない。

里奈は両手で顔をおおった。

謝ってもらわなきゃならないようなキスが最初のキスだなんて
悲しかった。

それを思い知ったことが。

惚れた相手でもないよ、やっぱ、泣くのかな

聡明、なんでそんなこと言ったの。

どうしてあなたはあんな目をしていたの。

あのときはわからなかったけれど、あなたの言葉のとおりには

あなたを思い出して悲しい。

泣かれたことに、英彰はかなり驚いた様子で呆然としていた。

でも、一端弾けた涙は止まらなくて、里奈自身も訳がわからなくな
っていたので、開き直って泣き倒した。

すすり泣きを繰り返す里奈を英彰はホームのペンチへと促す。

そして、隣に座った。

ハンカチで涙を押さえて、うつむいたまま、里奈は呟く。

「あんななんて大嫌い」

聞えたはずなのに、英彰はだまっただまま足元を見ている。

「どしたんだ、その顔」

「ひどい？」

不安げに尋ねると、聡明はいや、と短く答えて、くすりと笑った。

泣きはらしたせいで目がはれている。

里奈は大泣きするとまぶたがはれて人相が変わってしまう。時間がなかったから化粧もしていないし。

聡明と顔を合わせる家教の日に、なんであんなに大泣きしてしまっただんだか。それも公衆の面前で。

里奈がさよならも言わずたちあがったのは、聡明がくる時間に間に合わなくなりそうだったからだ。

英彰は首をひねって、里奈の姿を目で追う。

彼が見ていることを感じながら、駅の階段を降りた。

振りかえることができなかった。

「聡明」

「んー？」

「大嫌いって言われたらどんな気持？」

「いい気分じゃねえな、かなり」

「どんな相手でも？」

「ああ」

聡明は椅子から腰をあげて、丸めた参考書で里奈の頭をばかりとやった。

「言われたのか言ったのか知らんけどさ。言っちゃまったモンは取り消しても、事実として残るからな、くよくよしたって仕方ねえぞ。

言われたんなら人間には自己回復能力ってモンがあるから。世界中の人間全部とうまくやろうつーことが土台無理な話なんだからさ。気にすんな」

「聡明、悩みある？」

聡明は口許を歪める。

そして、なぜかとてもとてもやさしく笑った。

「あるよ」

「聡明でも？」

「ああ」

「自分が大嫌いになりそうな時もある？」

「……うん。なりそうじゃなくて、軽蔑する時がある。結局は自分が好きだから、くよくよするんだな。面倒だけどな」
別れ際の英彰の顔を思い出す。
自己嫌悪とかしたのだろうか。
自分を責めたりしたのだろうか。

聡明が頭に手をのせて、ぽんぽんと叩いてくれる。
眼を閉じて、里奈は思う。
そうされると、私は元気になれる。
聡明の手は、魔法の杖のよう。
たったひとふりで私の気持ちを浮上させてしまつから。

アイツには、あるのかな。
魔法の杖。

クリスマスが近い。

聡明とは相変わらずの師弟関係。
英彰とはギクシャクしたまま。
畠山とは下校を共にしている。

放課後前の清掃の時間。

今月は外掃除。中庭の掃き掃除。

枯葉を集めるだけでけっこうな労働になるし、12月の外掃除は寒すぎるし。

コートをはおって、手袋をして、完全防備でも凍えそうだ。

それでも副委員長という立場上、いつものようにもくもくとお掃除に励んでいたら、名前を呼ばれた。

顔をあげると、見た事のない女子生徒だった。

「何ですか」

ほづきを抱えたまま尋ねたら、相手は申し訳なさそうに視線をおと
して、

「3年の岩崎玲子と言います。突然話しかけてごめんなさいね。畠
山くんの事なんだけど」

来たか、と、里奈は目を半分にした。

まあ、睨まれたり、上履きを隠されるよりいい。

でもさあ、穏やかじゃないよなあ。

彼女は突然、里奈の手を取った。思わずぎょっとして腰を引きかけ
たが、耳に飛びこんできた言葉に驚愕。

「同性愛ってどう思う?」

どう思うって、なんですか

っ

!!

なんなんだ、えらくびっくらしたぞ。

爆弾発言をしておいて、金縛りにあっている里奈に彼女は微笑んで、
そして、手を離れた。

「私の話を詳しく聞きたくなったら、携帯に電話して」

と、制服のポケットからボールペンを取り出して、もう1度里奈の
手をとると、さらさらと手のひらに11ケタの番号を書いた。

「じゃーねー」

じゃあね、じゃねえよ。

手のひらを見つめながら里奈は思う。

わけわかんない、無視するに限ると思うんだけど、なんか、気になるしっ。

いきなり言われると衝撃的だわよ、どうせいあいつちやーさ。

ひゅおっと、北風が里奈のコートを煽っていった。

いろいろ難しいぞ、17歳。

なんか、ありそうで、恐いぞ。

「同性愛だ？」

聡明は言って、うーん、と頭に手を乗せた。

やっぱり、こういう話題は聡明にするに限る。

おかげで今日もお勉強はお留守だけど。

「俺はあいにくそういう趣向はもたないから、ヤローに恋愛の対象にされても応えられないけど、別に否定はしねえよ。寄ってきたら逃げるけど」

「なんで？」

「俺はたまたま、女が好き人間だっただけで。それが生物的にも倫理的にも正しいとしてもさ、心の問題ってのはそれだけじゃ片付けないねえからな」

「心ねえ」

「なんだってまた、んな事訊くんだよ」

里奈は畠山という3年生に頼まれて、一緒に下校している事と、

彼の名前を口にした女子生徒に脈絡もなく突然言われたことを話して聞かせた。

すると、聡明は首をひねって、

「もう少し突っ込んで話してみな。おまえとその3年のハタケって奴とのつながりはなに？」

「畠山センパイ」

「なんでもいいよ」

聡明は疑問に対して貪欲だ。

真相を究明したがるから、こんなことになる。

言いたくなかったが、真崎英彰の部活の先輩なのだと言ったら、聡明はやたらとこだわって、

「マサキくんって、大学に一緒に来た彼だよな？」

「うん」

「畠山クンと真崎くんは今どんな感じ？」

「え？」

「仲、いいの？ 悪いの？」

言われて里奈は首を傾げる。

「……いいとは言えなさそう」

「フーン……」

あ、と里奈は手を叩いて、いつぞやの英彰が部室に呼び出されて、とんでもなくよれよれになって逃げるように走ってきた事を思い出した。

でも、英彰にキスされた事も思い出してしまって、へこんでしまう。

「なんか思い出しただろ」

「思い出してないわよ」

「いや、顔が思い出したって言った」

「……言っていないもん」

「言った」

「言っていないってば」

「なんだよ、言ってみろ？」

しづしづ、自分がキスされたことは省いて、聞かせた。

なぜか聡明は眼をみひらいて、

「……まじか？」

なんて言う。

眉が寄せられて、複雑そうな顔。

わけがわからずに次の言葉を促したら、今度は聡明が口籠もった。

「……いや、あくまでも俺の憶測だから」

「なあにー？ あたしだけに白状させといてさあ、ずるい、ずるい
！！」

「いや、聞かん方がいいって」

「なんでよ」

「だから、訊かない方がいいって」

「えー！？」

聡明はこほん、とセキ払い一つ。

「方程式と同じだ。Xを求めるには、事実を並べてみればいい。それがあつてるかどうかは、数字じゃなくてこっちの話しだから、確
実じゃないけどな」

こっちと違って、聡明がおさえたのは胸。

わからん。

聡明がぼやいた。

「……人生いろいろ、オトコもイロイロ」

その日、聡明が帰ったあと。

里奈は手のひらに書かれた11ケタの相手に電話を試してみた。

ヘンナコトする人だよな、とムカツキながらも自分の携帯にきちんと番号をメモリーするあたり、里奈の副委員長気質な性格がにじみ

出る。

すると相手は嫌に喜んで、思わせぶりなことに。

「クリスマス・イブ、一緒に出かけられる？ そしたら話してあげる」

……？

なぜだろう、どーせーあい、という言葉が頭の中を駆けぬけていったのは。

女だっているいろいろありそうなんですけど。

彼女は自分のことを岩崎玲子と名乗った。

<math>3</math> ; クリスマスの夢は見ましたか？

どきどきした。

だってさ、あたしつてば、とんでもないこと企んでるわけさ。
クリスマスの日、聡明と一緒にできるかもしれないこと、考えちゃっ
てるわけだから。

と、いうことで、野々村里奈さんは、震える手を隠しながら聡明
に尋ねた。

「クリスマス・イブ、暇？」

「暇じゃない。飲み会、3軒ハシゴ予定」

なんてあっさり言われて、があっさり。

「なんで？」

「いい、予定があるんなら」

「クリスマスだなんだという前に、この問5を完璧に解き明かせ」

「聡明、クリスマス限定で会ってと言われるのは、どういうこと？」

「そりゃ、深ヨミせざるを得ないだろう」

言って、聡明の細い目が意味深ににやりと笑った。

「言われたのか？」

「うん」

「おお」

満面の笑みで拍手すんな、ぼけ。

里奈は浮かぬ顔で溜息をつく。

「オナナの子なんだけど」

聡明の笑顔が、一瞬止まった。

「おんなって、なんだそりゃ」

「オナナの子でも、深読みする？ ほら、この間どーせーあいがど

ーのって言ったひとなんだよう」

机に顔を伏せると、聡明の陽気な笑い声がして、頭をなぜられた。

「がきんちよ、もてんじゃん」

「もてるって言う?!」

「言っんじゃねえか？」

「きっぱり言わないでよ、ばかぁ。あー、どうしよう、どうしよう。

聡明、一緒について来てよ」

「ばーか、なんで俺が」

「だってさ」

「乗り気じゃないなら断ればいいだけの話じゃん」

「いや、それがね。なんか教えてくれるみたいで、気になるの。聡

明、れずって、どんなの？」

「俺がわかるか」

「そんじゃホモ」

「…………… ホモの気持はわからんけど、男に告白された気持はわ

かる」

聞いて里奈はぼかんとした。

その言葉の意味を脳がキャッチした時点で、驚きで身体が跳びあが

って椅子ごとひっくり返った。

派手な音をたてて90度回転。

床に頭を打ちつけて、それを押さえて唸りながら眺める天井。

とつても情けない。

「いたあい……………」

そんな里奈をのぞきこみながら、身体を屈めて聡明が一言。

「アホ」

勉強をする気になれなくて、里奈は机から離れて、ソファに腰をおろして膝を抱えていた。

里奈のかわりに聡明が学習機の椅子に座って、偉そうにふんぞり返っている。

「聡明もいろんな際どい橋渡ってんのね」

「好きでやってるわけじゃねえけどな。大丈夫か、ばかになってねえか？」

打ちつけた後頭部。なぜしてみるとコブができていた。

「しゃあねえな、付き合ってやるよ」

「え？」

「24日だろ？ 恐いもん見たさでおまえにつきあってやるよ。そのかわり、期末で5番以内入れよ。交換条件だ」

嬉しさで声が出なかった。

何着ようかなあ、どんな髪型にしようかなあ。

そんなことを考えると、笑みがこぼれてくる。

お小遣いはたいて、新しいワンピース買ったちゃおうかなあ。

あ、でも、勉強しなきゃ。

浮かれて、勉強サボりましたなんて聡明に思われたくない。

学年で5番以内なんて……はつきり言って今まで成し遂げたことがない。

でも、里奈の決意は岩より固い。

3年生の教室の前に行くのは勇気が必要とする。まして12月のこの時期受験生である彼らはピリピリしていて、はたから見ているととても恐い存在だったりする。

そんな中で彼女はひとり悠然としているように見えた。呼び出してもらって教室のドアのところまで待っていると、彼女は里奈の姿を見つけてニッコリと笑いかけてきた。「あなたから来てくれるなんて、うれしい」引きつり笑いを浮かべながら里奈は思った。

あたしはできれば来たくなかったぞ。

24日、保護者つきでよければなら会ってもいいです、とお返事をする、「同性愛ってどう思う?」の岩崎玲子さんは、落胆することもなく、いいわよ、とあっさり。

ホッとしていると、彼女は黒いつやつやとした髪をかきあげて言った。

「保護者って彼氏?」

「いいえ、家庭教師の人です」

「家庭教師? 随分面倒見がいいのね、その家庭教師」コメントしづらい。

ので、黙っていると、彼女はくすりとまた笑う。

よく見ると日本人形みたいな顔をしている。

白い肌が陶器のようで、冷たそうにきれいな少女だ。

「マサキクンに大学生の彼女がいるってうわさ知ってる?」

まさきといわれて一瞬誰のことかわからなかった。

「マサキヒデアキ」

「あー」

真崎のことかあ、と里奈は思って、あっさりと首を横に振った。

「知りません。そうなんですか」

「さあ?」

またくすくす笑う。意味ありげに笑ってばかりの表情といい、なんか妖しい人だ。

あんまりお近づきになりたくなかったり……。

セッティングは完了したものの、保護者には期末テストの成績が5番以内であることを要求されている。

全てはそこだ。

クリスマスデートのためなら、あたしは寝食忘れて勉強してやるんだから。

本当に、里奈の決意は岩より固い。

そんなこんなで期末テストを乗り越えた。

期末前の里奈の試験勉強への没頭のすさまじさは、聡明が言葉を失うほどだったことを明記しておく。

結果は当然5番以内、学年で4位だった。

掲示板に張り出された長者番付を見て、里奈は呆然としてしまう。

拳を固めて、里奈はジーンとこみ上げてくる感動に目頭が熱くなるほど。

やった、あたしはやった。

女の一念は岩だって砕くんだからッ。

ああ、聡明に早く報告したい。

ああ、今日は下校途中に服を買いに行こう、自分へのご褒美だ。

そんなことで頭がいっぱいの里奈の隣で奈津美がぼつりと呟いた。

「マサキが……順位落としてる」

「えー？」

「ほら、13位だって。どうしたんだらう」

奈津美は心配そうに呟く。

言われてはじめて気がついた里奈は、改めて長者番付での真崎英彰の名前を探した。

なるほど、確かに13位。

常に5番圈内だった真崎英彰が。

わずかな驚きに里奈も複雑な気分になった。

英彰とはあれ以来口をきくこともなく、視線を合わせることもしていない。

「調子悪かったんじゃない？ 誰だってそういつときあるよ……真崎だって……ね。元気だしなよ」

「うん……」

教室に戻って、なんとなく英彰の姿を探した。

英彰は窓際の誰かの机に肘をついて、頬杖をついている。

彼の視線は窓の外。

横顔がどことなく憂いを帯びているから、里奈は首を傾げた。

成績が落ちたこと、そんなにショックだったのかな。

以前の、何もないころだったら。

委員長&副委員長コンビの片割れとして、声のひとつでもかけてやるけれど、今はどうしてもためられる。

里奈の視線に気づいたかのように英彰がこちらに顔を向けてきた。驚いた。

慌てて顔を反らした。

その後で英彰がどんな顔をしたかわからないまま、始業のベル。

特別な日だ、今日は。

今日から冬休みになる。

そして、クリスマス・イブだから。

好きな人と過ごせるはじめてのイブだから。

こんなに嬉しくて窒息しそうなのに、心細くて泣き出したい。経験したことがないほどに不安定なココロをもてあましながら、里奈は新しい口紅を唇にのせている。あと、2時間後には聡明とディナーしてるんだ。誘ってくれた岩崎玲子さんは、フランス料理をセレクトしたわとおっしゃった。知り合いの店だから堅苦しく思わないでね、と余裕綽綽のお言葉も。

今までの聡明との会話により判明した聡明が好ましいと思う装いは。

バカっぽくない女、ということだ。

バカの基準は聡明の場合、学力うんぬんよりも、礼儀知らずとかそういう部分に用いられることが多い。里奈は普段バカと連呼されているから、挽回もこめて、かなり気を使ってみたつもり。

しかし、ナチュラルメイクだとしても、お化粧した顔を見て聡明はバカというかもしれない……。

そんなことをつらつらと考えていたら、母親が心配そうに、

「都村先生にご迷惑をかけないようにな」

「うん」

クリスマス・イブの夜に外出することが許されたのは聡明がとりなしてくれたおかげといってもいい。

聡明は如才なかった。本当に。

通常なら、生徒をたぶらかしたと言われそうなのになのに、あっけなく信用までとりつけるのだから。

詐欺師か、こいつは。

「レストランでお食事なんてそのお友達もすごいわね。でも、里奈ちゃんはまだ高校生なんだから、過度の贅沢はしないでね」

と、言いながら、母親は臨時のお小遣いをくれたりして。

呼び鈴が鳴った。

心臓が文字通りに跳ねあがる。

聡明だ。

玄関で出迎えて、里奈は目を見開いた。

聡明がスーツを着ている。

それがまたよく似合っている。

聡明には絶対に無縁のものだと思っていたのに。

「ごめんな、少し遅れた。門の前にタクシー待たせてあるから」

聡明の声がよく聞えないほどに、頭の中はぼんやりしている。

聡明と両親が世間話をはじめたのに内容が入ってこないくらい。

「里奈ちゃん、ほら、御支度なさい。都村先生をお待たせしているんだから」

「あ、はい」

タクシーに乗せられてから。

聡明は窓に肘をついて、指先を口許にあてている。

視線は窓の外。

機嫌悪いのかな、黙ったまま。

こんなとき、気のきいた話題を思いつかない自分が情けない。口を
ついて出る言葉なんてこんなばかり。

「ねえねえ、見て見て」

自分の唇を指差す里奈のほづを、物憂げな動作で見る聡明。

「なんだよ？」

「アユの新色、いいと思わない？どうどう？」

「なんだアユって……ああ、浜崎あゆみか」

聡明は呆れたように肩をすくめて、改めて里奈の姿を見る。

そして、なぜか小さく笑って、

「暗いから口紅の色は見えねえけど、その頭と服は可愛い」

不覚にも、言葉が出なかった。

ぽかんとしたまま聡明をみていると、彼は口許を歪めて、

「なんだよ？ 思ったから言ったただだよ。地雷踏んだみたいな顔すんな」

ちよ、調子狂う……。

里奈はどきどきしながら、眉をひそめる。

いつもみたいに、「ばーか、がきんちよ」とか言ってくれたほうが、会話にノリができてラクなのに。

そんな女の子に言うみたいなこと。もう一度言われてしまったら。泣くぞ、絶対。

聡明にそういうことで誉められた事、はじめてだからさ。

考えて見れば両親以外の人と、フランス料理店なんてところに足を踏み入れるのははじめてだった。

タクシーが停まって、聡明が降りる。

そして、実にさりげなく、里奈に手を差し伸べてきた。

「は？」

聡明を見上げると、聡明はあのなあと呟いて、ぺしんと里奈の頭を軽く叩いた。

「スカートだと車から降り辛いだろうから、手え貸してやるって言うてんだよ。ぽけつとすんな」

「あ、そりゃどうも」

もごもご言いながら顔を赤らめつつ、聡明の手に自分のそれをのせる。

「あ、ありがとう」

「どーいたしました」

聡明はそっけなく言って、店に向かって歩き始めると、今度はドアをあけてくれる。

それが里奈の為にあけてくれるみたいなしぐさだから、戸惑いは最高潮。

だから舞いあがってしまって、

「気がきくじゃんー ありがとねー」

なんて言っちゃった。

それで少なからずともへこんでいると、聡明はアホンダラとぼやいて、

「こういう場所に来た時くらいはその小生意気な口閉じとけ」
ハイ……。

素直なお返事は胸の中。

音にする事ができないあたり、嫌な娘だと里奈は自分で思う。

Les Aventuriers

その看板を眺めて聡明が呟いた。

「冒険者たち」

「なに？」

「店の名前。フランス語で冒険者たち」

「ふうん……」

店内に入って思ったことは、あ、このお店好きだな、ということだった。

いつか雑誌で見た、フランスの旅籠みたいな雰囲気。

堅苦しくなくて、入りやすい。

マダムが微笑みながら歩み寄ってきた。

30代くらいなのかな、ほっそりとした上品そうな人。

白いエプロンがよくにあっている。

今も大変お美しいが、若い頃はさぞ美人だったに違いない。

「いらっしやいませ」

「岩崎さんという方と待ち合わせです」

「玲子ちゃんのお客さまですね。はい、かしこまりました。こちら

へ」

岩崎玲子は窓際のテーブルで、親しげに長身のギャルソンと話している。

「英ちゃん、玲子ちゃん」

マダムが言つと、ギャルソンが振りかえつた。
岩崎玲子があら、というようににこりと笑う。

「あれ？」

聡明が笑顔を浮かべて呟いた。

里奈は目をみひらいて立ちすくむ。

驚きというよりは衝撃。

もちろん、相手だって同じように絶句している。

ギャルソンはクラスの委員長、真崎英彰だった。

彼の口許がわずかにひらいて、「あ」という形を作っている。

眼鏡のない真崎英彰は、前髪を後ろに流して額を見せて、到底コーサーには見えない雰囲気。

我に返るのは英彰のほうが早かった。

玲子を睨むように見て、

「なんのつもりだよ」

と、低い声を出す。

玲子は素直にゴメンと謝った。

「だって、家庭教師が男だなんて思わなかったのよ」

マダムだけがきよんとんととして、それでも微笑みを浮かべながら会釈をして立ち去った。

「ホレ、ご挨拶」

聡明が里奈の後頭部を押そうとする。

されるままに、英彰に向かって頭を下げた。

ひどく混乱した状態なので、もちろん言葉なんて出てこなかった。

英彰は無言のまま椅子を引き、里奈に座るように促す。

聡明に背中を押されてその椅子に腰掛けた。

椅子を押してもらったタイミングがわからなくて、すとん、と腰を降ろしたら、

「お客様、失礼いたします」

なんて英彰に言われて、椅子ごとテーブルのほうに押しこまれた。とつても情けなかった。

聡明は自分でさっさと腰を降ろして、まず、招いてくれた玲子に声をかけた。

「野暮な事してすみませんね、本日のコイツの保護者で、都村とい
います」

玲子はいいえ、と口許で微笑んで、

「はじめまして岩崎です。まさか男の方だと思っていなくて、驚き
ましたけど」

「一応ね、生物学上はそういうことになってます」

「おもしろい方」

「どうも」

そして、聡明は英彰を見上げる。

「クリスマスにバイト？」

英彰はええ、と頷く。

補うように玲子が言った。

「英彰はこのオーナー夫婦の一人息子なんです。だからうちの
お手伝いななのね。今日予約ができたのもそういうわけなの」

「余計な事言うなよ」

彼女に対する英彰の言葉はあくまでもそっけなくて冷たい。

聡明はそんな二人をしばしばと見つめて、

「もしかして、従姉弟？」

玲子と英彰が顔を見合わせた。

玲子が驚きましたというように目を輝かせて、

「どうしてわかりました？」

聡明は得意になることもなく、淡々と、

「岩崎さんと、マダムの顔立ちが似てるから」

「ああ、私は母親に似ているって言われます。母と叔母もよく似ているって言われますし。すばらしい洞察力ですね」

「さあ、どうだろ？」

曖昧に呟きながら聡明は英彰に尋ねた。

「ソムリエいるの？」

「はい。後程こちらへまいります。それから本日のお食事はこちらのお任せということで受けたまわっております。こちらがメニューですが、苦手なものはございますか？」

英彰はナプキンの上に置かれたカードをそっと手のひらでさした。

コースメニューが記してある。

げげげっ、フランス語だっ。

里奈が困惑しているとなりで聡明はそれを軽く眺めて、里奈に尋ねてきた。

「おまえ、鴨は食えるか？」

「え？ か、かも？カモってトリのカモ？」

「俺は平気だけど、くせがあるらしいから」

「鳥ならへーきだと思っ」

「カタツムリは食えるか？」

「カタツムリ??？」

「エスカルゴだよ」

「ああ……食べた事ないからわかんない」

「そんじゃ、ものは試しに食ってみな」

聡明はどうやらメニューの内容を理解しているらしい。

感嘆の眼差しで見つめていると、聡明がカードを裏返して、くすつと笑った。

「ああ、日本語のメニューもあるんだ」

へ??と思っていると、背後から手が伸びてきて、そっと裏返してく

れる。

「うちの鴨はちゃんと臭み抜いてあるから」

英彰の静かな声。

それにしてもどーゆー状況なんだろう。

一番一緒にいたい聡明がいて、顔も見たくない真崎英彰がいて。

そんなでもって得体の知れない美少女が微笑んでると来た。

さっさと帰りたいかも。

聡明とディナーなんて夢みたいだけど、それすらも重荷になってきた。

里奈は生唾を飲んで、胸でごちる。

心臓が壊れそうです。

なのに聡明は英彰にのんきに言うんだ。

「真崎君も一緒に食べればいいんだけどな」

「人手が足りなくて店に出ろって親に頼まれたんです。残念ですけど」

淡々と注文を確認して、英彰はテーブルから離れていった。

聡明は白いワインを飲んでいる。

そんな聡明に岩崎玲子が言った。

「都村さんって不思議な方」

「そう?」

「こういう席のルール無視しているのに、違和感がありませんもの」
聡明は軽く笑った。

「基本ルールは守ってるつもりだけどね、俺でも」

会話の意味がわからない里奈に玲子がやさしく説いた。

「肉料理にはワインは赤、とか言われるのね。都村さんはそういうのを無視して自分の飲みたいものをオーダーされているの。ソムリ

工の方が奇妙な顔をしたのはそういうわけなの。せつかくお料理に合うと思われるワインを選んだのに、全く無視しているから。それが悪い事ではないのよ、言っておくけど」

「本当は今の気分はビールなんだけどな」

「ビールはいけませんね」

「そんな事はないと思うけど、一応遠慮してみた」

玲子は怪訝そうに首を傾げる。

「都村さんのこういう席での基本ルールって？」

「楽しんで食べる」

里奈は眉をひそめた。

なにいつてんのよ、聡明。

一方の玲子はぼかんとして、それからくすくす笑い出した。

「正論ですね。余計な事を言ってしまうってマナー違反は私のほうです」

「いや、別にいいんだけど。俺はがさつですから」

聡明はどこでも本当に堂々としている。

卑屈になることになんてあるのかな。

彼の存在は心強い。

この人ができると言ったら、本当になんでもできてしまうような気がする。

そんな強さが好きだ。

やんちゃな男の子みたいなどころも好きだけど、聡明は大人だからそれが愛しく思えるのかもしれない。

好きというキモチを強く意識すると、目頭が熱くなる。

泣きたい程に好きだと思えば瞬間は絶対に幸せじゃない。

苦しくて、本当に苦しくて。

こんなキモチまで、あなたは私に教えてくれた。

「野々村さん、聞いてる？」

「えっ？ ああ、ゴメンナサイ」

玲子の声に我に返る。

「英彰の噂のこと。大学生の彼女がいるって」

里奈は眉をひそめた。

前にも同じことを言っていたけれど、そんなことどうして何度も言われなければならないのだろう。

「本人はデマだって言うの。でも、K大付近できれいなお姉さんと歩いてたって、同じクラスの女の子から聞いたのよ。彼女、英彰のファンだから従姉の私に何かあると確かめに来るの」

彼女の瞳はからかいの色を浮かべている。

K大？

聡明の大学だ。

それを聞いた聡明は軽く目を眇めてから、テーブルに肘をついて、口許に指をあてた。彼は考え事をするとき、そういう仕草をする。

玲子の真意を探るように、静かに見つめる。

その瞳は深さを帯びる。

なんでも見透かそうとする、そんな瞳。

「英彰はなにも言わないの。否定もしないし、肯定もしない」

正直いうと、英彰の話題はうんざりだった。

やたらと意味ありげに含んだ言葉ばかり言っただけで、真崎英彰が誰と付き合おうと、そんなこと里奈には関係のない話。

そんな風に表情を曇らせている里奈に、玲子は改めて微笑みかけた。「学校と全然雰囲気違うのね。わたしきれいなコ好きだから、嬉しくなっちゃうな。いつもそうしてればいいのに」

やめてとお願いしたい。

無性に苛立つ。

なんだろう、この人の話を聞いていると、腹が立ってくる。

なのに言葉が出てこなくて里奈が黙っていると、不意に聡明の声か

割りこんできた。

「おい、いつもの調子でなんか言えよ」

飄々とした言葉。

里奈は聡明に視線を向けた。

それでも黙っていることしか出来ないでいると、口許をゆがめられた。

聡明は傍らに通りかかったギャルソンにグラスワインを注文すると、おもむろに玲子に顔を向けて、里奈を親指の先で指差しながら言った。

「まわりくどい話方しても、コイツにはわかんねえよ。それにそういう話をきかなきゃならない義理はコイツにはねえし。ナマイキでどうしようもねえガキンちよだけど、コイツは俺の可愛い教え子なんだわ。あんまり苛めないでやってくんないかな」

「苛めてました？」

新しいグラスをギャルソンがそつとテーブルにのせる。

聡明はそれを手にして、軽く首をかしげた。

「そのK大付近で一緒に歩いてた大学生風の女って、コイツだろ？」
「コイツだろ？」という聡明のセリフに、里奈はフォークを取り落としそうになった。

オードブルの並ぶ皿の上、きれいな色をしたテリーヌにフォークを刺したまま、里奈は呆然と聡明の横顔を見つめた。

「うちの大学に二人で来た事あるしな」

「やっぱりそうなんだ。英彰とぼけてたけど、肯定も否定もしないのはあなただからだったんだ」

玲子はにっこりと微笑む。

あなただからと言われると、なんのこつちゃ、よく意味がわからないが、とにかく、モンダイは里奈自身に降りかかってきた。

「じつ、誤解です」

「わかってるわよ、そんなの」

あっさりと切り返され、里奈はぼかんとした。

微笑んでいた玲子の目が、厳しくなったから。

「ハタケと一緒に下校してるだけでもあなたは大注目人物なのよ？
それなのに今度は英彰とつきあってるなんて噂されたら、どうなると思う？」

ハタケ、とは畠山の事だろう。

二股女と陰口叩かれ、それぞれのファンに苛められて、高校生活真っ暗だ。

青ざめていると玲子は溜息をつきつき、

「しっかりしているようで、意外とおまぬけよね、あなたって。ハタケと一緒に歩くのやめなさい。言っておくけど私はハタケのこと好きなんかじゃないから意地悪してるとか思わないでね。ハタケは自分で自分のこと始末できる男なんだからあいつの言うこと鵜呑みにしちゃだめよ？」

「はあ……。あの」

「なに？」

「畠山先輩はどうしてわたしなんかに、一緒に下校してなんて言うて来たんでしょう？」

「どうして私に訊くの」

「知ってそうだから……いろいろと」

ようやく会話が成立し始めた二人の様子を見ながら、聡明はふと時間を感じする仕草。

まあいいか、と肩をすくめて、改めて興味深そうに二人の会話に耳を傾ける。

「いろいろ、そりゃー知ってるわよ。でも、ハタケに悪いからいいないけど。でもね、友達が間違った事をしてるって時はなんとかしてやりたいって思うの。英彰は従弟だしね」

「あの、ひとついいですか？」

「なに？」

「畠山先輩の話にどうしてマサキ……じゃなくって、真崎君が出てくるんでしょう？」

「それいつちゃうと、ハタケに悪いのよ」

「わかんないです」

あああ、と玲子は額を押さえた。

「にぶちんって呼んであげる。察しなさいよ、わたしヒントいっぱいあげたでしょ?！」

里奈はその様子にきよとんとする。

お人形さんみたいだなミスティアス美少女だと思っていたのだが……随分ちがうぞ? にぶちんって言ったよね? 今。

黙ったままの里奈の代わりのように聡明が、

「例えばどーせーあいとか?」

「そうそう、それ……って、どうしてあなたが知ってるんですか?」

玲子は聡明を睨むような眼差し。

口を挟んだ聡明は肩をすくめて、わははと笑った。

「あなた、都村さんにはどういうことでもお話するの?」

「いや、あの、アレは、白状させられたというか、あの、その」

里奈はバツが悪くて、しどろもどろ。

そんな事をしていたら、背後に人の気配。

感じとって反射的に振り返ると、皿を手のひらに2枚腕に1枚のせた英彰が目を据わらせて立っていた。

里奈がギョツとしたのを機会にしたように、英彰は口を開く。

「余計な事、言うな」

玲子はそんな英彰を上目遣いで睨み返す。

「ハタケのキモチも考えたら?」

「どうして俺があの人への気持ちなんて考えなきゃなんないんだ?」

「ハタケは受験前なのよ」

「そんなこと知るかよ」

そうぶつきらばうに言った英彰に、聡明が手を伸ばす。

「うまそうな魚だなあ、スズキ？」

「あ、スイマセン」

英彰は慌てて、テーブルに皿を置く。

そして立ち去ろうとした英彰に玲子が言う。

「ハタケはふざけたんじゃないわ」

それを聞いて英彰が表情を止める。

視線を落として、なぜかちらりと里奈を見た。

「そっちのほうが最低だろ。ふざけたんじゃないわ、なにしたらいいわけ？」

どーしてコイツはあたしのことを見ながら、こんな事を大真面目に言うわけ？

戦々恐々、里奈が英彰から逃げるように前を向いて俯いたとき、爆弾が落ちた。

「俺だつて真剣だった。ふざけてなんかいなかった」

ボソツと吐き捨てられたような言葉に、里奈は驚きを通り越して、混乱。

真剣って？

玲子が驚いたように目を見開いて言う。

「あんたも？」

英彰は返事をしない、そのまま、踵を返そうとする。

しかし、玲子はお構いなしに続けた。それもイタつて真面目に。

「ゲイは恥じる事じゃないわ」

ぶっ、と聡明がワインを吹く。

そんな聡明に驚きつつも、それ以上に驚かされた玲子に里奈はまん丸の目で視線を注いだ。

「ごめん、わたし、てっきり……、このコのこと好きなのかと思つて、見当ちがいなコトしちゃったわ」

英彰が渋い顔で、頭においた。

「誰がゲイだよ。俺がそんなわけあるかよ」

「じゃ、なんなのよ？」

「お前にはカンケーない。推薦で進路決まったからって勢い込んできまわすなよ。迷惑だし、いくら親戚だからってマジで切れるかな」

眉をひそめながら、思案にくれていた玲子は、思いついたように手を叩いた。

「あんだ、このコになんかしたの？」

里奈は必死でこの状況に耐えている。

コレ以上の爆弾が落ちないように、冷や汗をぬぐう事も出来ずに、金縛りにあつたまま。

でも、英彰は冷たい目をして、里奈を一瞬見下ろした。

そして、腕を組んで言う。開き直ったらしい。

「ああ、やったよ」

「まさか」

「キスしたよ。それから無視されてるし、大嫌いなんだってさ」

だからどうした、とでもいうように英彰は言い捨てて、今度こそ立ち去った。

この、ボケ。

里奈は胸でぽつんと呟いた。

イキオイは全然なくて、ほんとうに脱力しきつた感じで。

すごく、すごく、がっかりしている。

そのがっかり、という感じは適当ではないけれど、里奈のココロはまさにそれがぴったりだった。

何かに失望した感じ。

俯いていると、聡明が言った。

「帰るぞ」

「え？」

聡明はさつさと腰をあげていささか乱暴に里奈の腕を掴む。

「飯なら別のトコで食わせてやる。さつさと立て」

「え？ えっ？」

引きずられるままに、バックを掴んで里奈は玲子に頭を下げた。

「すつ、すみませんっ」

「人のいいこと言つてんじゃねえぞ、バカ」

玲子が自己嫌悪をそのまま表情に出して、ゴメンみたいな事を呟いたが、里奈はそれどころではない。

里奈の腕を掴んだ聡明はずんずん歩く。二人分のコートを持ってくるように身近にいた支配人らしき恰幅のいい男性に言う。そして、食事代の精算をするために入り口で立ち止まる。里奈にはその間すらここにいるなとばかりに、ドアを開けて、背を押してしまう。

英彰の母親であるマダムが、お代は済んでいますからと答えたにもかかわらず、聡明は言う。

「自分とコイツのは払います。勘定がややこしくなるなら、俺が払った分そっくり渡してください」

店の前ではつんと立ち尽くしていると、コートを持った聡明が店から出てきて、里奈の肩にかけてくれた。

袖を通す事をせず、里奈はぼんやりと聡明を見上げる。

そんな里奈に聡明は笑いかけて、さあ、歩けと背中を押して促した。そうされるままにとぼとぼ足を進めると、聡明は上着のポケットから携帯電話を取り出して、時間を見る。

「まだ早いな、なんか食おうぜ」

「聡明酔つてないの？ ワインいっぱい飲んでたじゃない」

「あ？ んなの気にすんな」

羽織ったばかりのコートのポケットに両手を入れて、聡明はゆっくり歩く。

その崩れた感じが彼らしくていい。

スーツを着ていても、何を身にまとおうと、聡明は聡明。

他の何者でもない、そんな強さ。

「騒ぐか？ ヒマしてそうなやつ集めて。クリスマスなんかこそ食らえっさ」

このまま返すのは可哀想だと聡明は思っているのかもしれない。かなり傷ついたはずなのに、里奈は泣くことも出来なくて、ただぼんやりしているだけ。

でも、確かに、このまま帰ったら。一人になったら、絶対に思い出して泣く。

聡明には。

聡明にだけは。

キスなんて言葉、それをしたなんて言葉、聞かれなくなかった。

「ヒマしてそうなのヤツ？」

「例えば、佳乃とか。あいつ絶対ひとりだから……あ、研究室の連中と飲んでるかもしれないけどさ」

「やだ」

「んー？」

里奈は力なく首を振る。そして、聡明の腕を掴んだ。

掴まれた腕を見下ろしながら、聡明がきよとんとする。

「誰にも会いたくない」

聡明といたい。

佳乃さんの名前なんて言わないで。

声に出来ない言葉が伝わりませんように。

だから、カラ元気でごまかさなくっちゃ。

「聡明の友達なんて、イケてなさそーで、やだ」

「しっつれーなやつだな」

「だって大学院生なんてべんきょーオタクっぽくて」

「俺がそう見えるか？」

ううん、と里奈は首を横に振る。

そして、

「大学院生には見えないし」

「んだよ？ 見えないし、の次はなんだよ？」

「頭悪そう、聡明って。目、細かいしさあ。顔、どうにかなればいいのにねえ」

「顔はどうにもならんよ、顔は」

言われていることこそサイアクなのに、聡明は笑っている。だから里奈は明るい声を出す。

ワガママだってそのほうが言いやすい。

「聡明、カラオケ行こうよ」

「カラオケ？ 二人でかよ？」

「うん、あたしの浜崎あゆみはかなりイケてるよ？」

「浜崎あゆみねえ。一時間でいいか？」

「いい、いいよ！」

「てんすーつけてやる。赤点だったら俺にラーメンおごれよ？」

「コーコーサーにたかるわけ？ サイター！ 聡明はなに歌うの？」

「俺？ 俺はMJが得意だ」

「MJってマイケル・ジャクソン?!」

「踊れるし」

「踊る?! バカじゃん?!」

「るっせえぞ、がきんちよ」

ねえ、聡明。

片想いするには、あなたってとてもとても。

嫌な人だよ。

ホント、好きになりすぎるよ。

休憩中に玲子が厨房に乗りこんできた。

彼女は一見とてもとても美形で近寄りがたい美人だが、子供の頃からの付き合いで性格はお互いに知り尽くしている。

だから、英彰には彼女のその行動は予想していなくもなくて、たいして驚きもしなかった。

玲子はキツイ。

桜色の唇から毒を吐かせれば天下一品だ。

当然やる事も突飛すぎて、いつも英彰の度肝を抜いてきた。

今夜だって、野々村里奈を連れてきた。

どういう因果が都村聡明までも一緒で。

「英彰、叔母さんの許可はもらったわ。外に出て」

英彰は彼女に背を向けたまま、コーヒーをカップに注ぐ。

返事をする気にはなれなかった。

すると玲子は英彰のシャツの襟を掴む。

それを腕で払うと、玲子はいよいよ怒りがこみ上げてきたらしい。

「お水ください。コップでも、バケツでも」

厨房に向かってそんなことを言っている。

英彰は振りかえりながら、彼女を追い払うべく、

「邪魔。今日は並みじゃなく忙しい日なんだ。さっさと出てけ……

!?!」

最後まで言えなかった。

玲子に氷入りのコップの水を真正面からぶちまけられたので。

「その格好じゃ、店には出られないわね」

水も滴る顔を押しさえながら、英彰はなんとも言えない気分で溜息をついた。

それくらいしかできなかった。

「悪かったわね」

店の裏で、壁に寄りかかって玲子の言葉を聞いている。

英彰の頭にはタオル。

それはうまい具合に玲子から表情を隠してくれている。

「クリスマスに家の手伝いなんてやってるあんたにクリスマスプレ

ゼントのつもりで、彼女を招待したのよ。まさか、男連れで来ると思わなかったし……」

「どう思う？」

「なにを？」

「都村つて人」

玲子はふう、と息をついて、

「はつきり言っていていい？」

「ああ」

「英彰が逆立ちしても勝てない」

「……」

「英彰には英彰のいい所、いっぱいあるのよ。顔とか、頭とか。でも、都村さんには敵わないわ。今の英彰は」

傷ついた？ と玲子が顔をのぞきこんでくる。

傷つきはしたが、その通りだと自分でも思うから始末が悪い。

それにしてもはつきりものを言う女だな、相変わらず。

「ハタケのこと、許してあげてとまでは言わない。でも、無視するのはやめてあげて。文句があるなら言っ、無視しないであげて」

「それを言うために、あいつの事呼びつけて、俺の機嫌とろうとしたんだ？」

玲子は返答に詰まりながらも、ややあって、しぶしぶそれを認めた。

「なんであいつなんだよ？」

「わかるわよ。英彰はわかりやすいから。ハタケにあの子の話ばかりしてたんでしょ？」

野々村里奈の話友達にしたことはない。

一人っ子の英彰からすると、可愛がってくれた畠山はいわば兄的に存在で、本当の兄弟ではない分、砕けているいろいろ話したような気がする。

それほどに信頼というか、親しく思っていた先輩。

ささやかではあるけれど、尊敬さえしていた先輩。

「ハタケだって、自分で自分のやった事信じられないのよ。わたし

に「ごぼすくらいなんだから相当参ってるのよ?」

「許せて?」

「そうとまでは言わないけど……あの子まきこんでるし。ハタケのやってる事やめさせたいのよ。友達として辛いから。痛々しくて」
英彰は天井を仰ぐ。

「友達とかいつてさ、先輩のこと好きなんじゃないの?」

意地悪な感情がそれを言わせた。

でも、玲子はあっさりと否定する。

「違うわよ。あいつの性格は好きだけど……どちらかというと同志よ」

どうし?

英彰は玲子を見下ろした。

玲子は小さく口許をほころばせて、視線を落とした。

自嘲気味にも見える、そんな顔。

「タブーがある、そんなもの同志よ」

見つめる相手がある。

見つめる相手に見つめ返してもらえること。

それがどうしても難しくくて。

「キス、しちゃったんだ。あの子に」

今度は英彰が答えられなかった。

「あの場でどうしてあんな事言ったの。英彰らしくもない」

「らしくなくなると全然ないよ。俺、そういう奴だよ」

「可哀想だった……とても」

英彰もあの子も。

玲子の眩きが痛い。

可哀想なのは被害者同志だから?

それとも、被害者で、加害者だから?

「英彰もハタケと同じだったのね。それならハタケのキモチもわかるでしょうに」

わかってても、それだけ。

それ以上にはどうにもならない。

あいつが俺を許せないという気持ちもわかる。

わかるけれど、それ以上にはどうにもならない。

どうしてあんなことをしてしまったんだろうという後悔。

そればかりが、胸で生きている。

でも、時々。

毎日のようにシカトされて傷つけられてる心とやらが、咳くんだ。

振り向いてもらえないなら、さらに傷つけてしまえ。

傷ついたぶん、そのぶんを埋めるみたいな一瞬の楽しみたいなそれに負けそうになって、ついに負けて、また、傷つけて、自分も傷ついて。

自分の弱さに苛立って、相手の頑なさにも苛立って。

キスなんて、本当に些細な事。

唇が触れるだけの、それだけのこと。

なのにどうして、こんなに意味があつて。

こんなになつてまでも、夢にまで見るのだろう。

傷つけても、傷ついてても、それでも。

<4> 「好きだから」は免罪符になりませんか？

聡明は慰めたりなんて言葉ではしなかった。

カラオケに付き合ってくれて、たくさん笑わせてくれて、そして、10時の門限までには家に送り届けてくれて、両親にきちんと大人の顔で挨拶してくれた。

悲喜もこもごもの1日だった。

ふう、と深い息をつきながらベッドに倒れこんで、里奈は枕を抱えこんだ。

その夜は無性に切なかった。

聡明の優しさとか、英彰の冷たさとか。

そういうものが、切なさになって押し寄せてくる。
大好きと大嫌い。

どうして同じくらいの割で記憶に留まるのだろう。

塾には行っていない里奈だが、冬休みに予備校の冬期集中講座に申し込んだ事を聡明に告げると、聡明は思いつきり顔をしかめて、「冬休みくらい遊べよ」
なんて言った。

聡明はきつと塾なんて行ったことがなくて、それでも抜群に頭が良

くて……ちゃんと遊んで学んでをやってきたのかもかもしれない。

「聡明、高校生のとき、勉強した？」

「それなりにな」

「大学生の時は？」

「遊んだ、遊んだ。自分から勉強しようなんてまーったく思わなかったな。今のほうがよっぽど勉強してるわ、俺」

「なんで？」

「修士論文つっつーのがあつてさ。提出したばかりなんだわ。それでマスターからドクターになれるかが決まるから、俺も必死よ」
のほほんと言つてのけるが、発している単語はスゴイ。

修士論文に、ドクター。ドクターって……博士？

「聡明、博士号とるの？」

「とれるかどうかはわかんねえけど、ドクターコースにはいくよ」

「……そうなんだ」

聡明の年のころ、たぶん里奈は社会人をやっているだろう。

勉強する、という行為がとても高尚ではないと思えた瞬間だった。

聡明からすると、邪道かもしれない、なんことを考えながら。

頭が良くなればなっただけ聡明に近づけるみたいなのがするからが
んばる、なんて。

失恋したらどうなるんだろ、あたしは。

考えが甘かった。

奈津美に誘われて申しこんだ予備校だ。

真崎英彰がいても、絶対におかしくないのだ。

なにも事情を知らないとはいえ、さすがに頭にきた。

「奈津美、真崎がいるからここにしたの？」

厳しい声で咎めると、奈津美は意外そうに目を見開いて、

「違つよ、うちから近かつたから。真崎がここに来てるなんて知らなかつたもん」

そう言われるとカツと来てしまった自分が情けなくなってきた、里奈はごめんと頭を下げた。
いいよ、と奈津美が笑う。

顔も見たくないものの、居るとなると気になる。

あいつには絶対にこっちの存在を悟られたくなくて、思わず伺っているのかもしれない。

里奈はそんな事を思いながら、ひとつ離れた列の窓際に席を取っている英彰を見る。

彼の端正な横顔。

ボールペンを弄ぶ指先。

真面目な顔で眼鏡をあげてみせたり、前方のボードを見つめたり。見つめていると、戸惑いが沸いてくる。

クリスマススイブの日、玲子と英彰の不可解な会話を思い出す事も多々ある。

それでもよくわからないので、頓挫しがちで。

俺だつて真剣だつた。ふさげてなんかいなかった。

あのとときの英彰の言葉。

素直に考えれば、あいつはわたしのことを好きだとか、そういうこととなる。

里奈は思わず口許に手をあてる。

どうしよう。

怖くなってきた。

予備校からいちばん近い駅付近のミスドに入ると、奈津美が嬉しそうに声をあげた。

ガラス越しの通りに真崎英彰の姿。

ひとりですたすた歩いている。
ギョツとして里奈はとっさに頭を伏せたものの、あんまり意味はな
くて。

「まーさーきー!!」

奈津美がこんこんとガラスを叩く。

里奈たちの周りのテーブルにいる客の目が集まってきて、里奈は居
心地の悪さを一瞬覚える。

あろうことか、英彰が気がついた。
足を止めて、驚いた顔をしている。

彼の視線はまず、里奈にくる。

でもすぐにそらされた。そのあと彼は奈津美に向かって柔らかく笑
い、手を振ってまた足を進める。

「行っちゃった。なんか、自己嫌悪。声かけなきゃよかった」

奈津美が肩をすくめる。

無視している分にはいい。

でも、視線をそらされると寂しくなる。

なんか嫌だな。

誰かを無視したり、してる自分。

ぽつん、と里奈は思う。

仮に、英彰が里奈のことを好きだったとして。

自分に置き換えてみれば、そりゃもう辛いはずだし。

聡明に無視される。

大嫌いといわれる。

死んじやいたって、思うはずだ。

死ぬということばを軽々しく使うなって、言う大人もいる。

でも、今の里奈には真実それほどに辛いことだから。

それほどに自分自身の中では重要なものだから。

でも、やっぱり許せなくて、英彰をみるとイヤなことばかり思い

出して、哀しくなる。

聡明の前であんなことを言われて、それがどんなにショックだったか。

せめて、どうしてもあるときあんなことになったのか、理解できればまた違うかもしれないんだけど。

なにがあったのかな、畠山先輩と。

そんなことをつらつら考え始めて、お正月を迎えて、冬休みもそろそろ終わろうとしていたころ。

休みに入ってから1度も顔を合わせていなかった畠山から携帯に連絡が入った。

予備校の帰りだろう、畠山は大きなバックを持っていた。

彼がまっていたのは、里奈の家の近くのパチンコ屋さんの前だった。そんな彼の呼び出しに里奈が家を出たのは午後の3時すぎ。

里奈のことを待っている間、なんと畠山はタバコなんぞをくわえて、大人の風情。里奈は走り寄って挨拶代わりにからかってみた。

「補導されますよ、先輩」

「大丈夫。俺ふけてるから」

畠山は驚くこともなく、ほら、とチョコレートをくれた。

「なんですか？」

「景品。今日は勝ったから」

思わずパチンコの看板と畠山を見比べる。

「ふ、不良ですね」

「ふ、不良でもないぞ。ちゃんと小遣いの範囲でやってるから」

畠山は笑いながら歩き出した。

彼について歩きながら、里奈は尋ねた。

「何時間やってたんですか？」

「開店から」

「え？」

畠山は吸殻をアスファルトに捨てて、スニーカーで踏みつける。

そして、苦笑いしながら、

「お前と話しないとだめだな　って思ってきたはいいけど、なかなか踏ん切りがつかなくて、パチンコしながら考えてた」

「はあ……先輩、予備校は？」

「サボった」

「……そですか」

寒さに里奈はコートの襟を合わせる。

マフラーしてくればよかったかも。

畠山はそれを見とってか、コンビニを指差した。

「コーヒーでもおごってやるよ」

ミルクティの缶をすすりながら、指先で飲み物の温かさを感じて、里奈はほっと息をつく。

「玲子から聞いた。ごめんな」

予想していなくもない話題だった。

でも、実際に言われると、どうしても驚きが顔に出てしまう。

「英彰のことは、俺や玲子がお前に言うのはなんか、気が退けるからそのへんは勘弁して欲しいんだけどさ」

「はい??？」

畠山は口籠もる。

唇を噛んでから、思いきったように、顔をあげた。

「オレな、英彰のこと好きなんだよ」

「は？」

それは文字通り、衝撃的発言だった。

ここでどういう反応をすればあたりさわりがいいのか。

表面的には啞然としながら、頭の中ではそんなことを考えて、里奈はひたすら焦りまくる。

でも、畠山は手榴弾でも投げるようにぼんぼん問題発言を放りつづける。

「そついうの自分でも認めたくなくてかなり悩んだりもしたんだけど、この間、つい」

つい、なんででしょうか？

里奈は目を見開いたまま、畠山を見つめた。

「押し倒しちまって」

衝撃度の高さに里奈は金縛り。

物事には前振りというものが必要だと思う。

心の準備だとか、そついうものも。

真つ白な灰なりそつです、あたしは。

しかし、畠山はもともと大人物に出来ているらしい。

里奈の肩を掴んで、

「戻ってこい、コラ」

なんて冗談を飛ばすし。

こうなつてくると、里奈もぶっちゃけてしまっしかなくて、

「あの、部室ですか？」

なんて核心を突いているような、突いていないようなことをたずねてしまう。

部室から飛び出してきたときのよれた格好。

眼鏡がなくて、シャツのボタンが跳んでいた、真崎英彰の姿。

そつか、そつだったのか。

畠山は一瞬目を見開いたけれど、困つたように顔をしかめて、

「まあ、そつだ。なんで知つてんの？」

「あるとき、わたしも真崎を探してて、真崎が部室から血相をかえて飛び出してくるのを目撃しました」

「そっか。それはイタイとこ押さえられたな」

「あー」

「なに？」

「先輩はもともとこのひとが好きなんですか？」

「違うぞ。俺は菅野美穂が北川景子が大好きだ」

「……カンノさんのほうが真崎よりも何倍もいけてると思います。

カンノさんには胸がありますけど、あいつにあるのは胸囲だけです」

「おもしろいこと言うな、お前」

「先輩が爆弾おとすから、頭の中がうまく機能してません」

「それにしちゃ、面白いけどな」

聡明の意味深なとぼけ方も、今ならばわかる。

なにが方程式だ、Xを求めるだ。

わかってたんなら、さっさと教えてくれればいいのに。

同性愛って、畠山先輩のことだったんだ。

自分の身に降りかかってくるかとひやひやしたのが、アホみたいだ。

「ごめんな、俺、おまえのこと利用した」

意味がわからず畠山を見ると、彼は軽く笑って、

「英彰が俺のことシカトするのはあたりまえなんだけど、謝りたく

ても謝れなくてな。で、お前に声をかけてみた」

「？ どうしてですか？」

「お前といれば、英彰が俺を見てくれる」

言って畠山は目をそらした。

なんとも言えない気持になった。

「どうして、とかは訊くなよ。答えられないから」

「ハイ……」

「ただな……自分でかなり惨めになったのも事実だ。だから、やめようと思う。お前にも迷惑かけてるみたいだし。イワサキから聞いたよ」

答えられなくて、里奈は俯いた。

こんなときなのにいたわるように畠山は言う。

「お前、家庭教師に惚れてんだって？」

「岩崎先輩が言ってましたか？」

「うん。英彰がバカなことしたのも、俺がバカなことしたからだから。今すぐは無理でも……あいつのこと許してやってよ」

「先輩はそれでいいんですか？」

「なにが？」

不思議な程に言葉がでてくる。

いつもならばためらうような言葉なのに。

「真崎に許してもらえないままでいいんですか？」

「許すもなにも考えてみるよ。男に好かれたってあいつにしてみれば気分悪いだけだしな」

でも、先輩、わたしに真崎のこと許せていいました。

やっぱり、許して欲しいんじゃないですか？

英彰のことは許せないのに。

畠山を許そうとしない英彰をひどいと思う。

でも、里奈が英彰にしていることは、まるっきり同じことだ。

ごめんな、と畠山が言う。

里奈にいいながら、英彰に言っているようにも思えて、切なくなってきた。

「衝撃の告白おわり。キモイだろ？ 俺」

「うん、と里奈は首を横に振った。

「ぶっちゃけてイイですか？」

「うん」

「ホモは直接関わってこない話だから平気です」

畠山はキョトンとして、それからほじけたように大爆笑。

ひーひー笑って、ついにはその場にしゃがみこんだ。

「誰にもいいませんから、私」

「さっ、サンキュ、あー、キツ……」

畠山の笑い声は屈託がなくて、どこか吹っ切れたような音をしていった。

あまりにも笑われすぎて、むっとしないでもなかったけれど、彼がそうやって笑っているのは気持ちが悪くなくなっていくような。

見上げると夕陽がいい具合に夜に染まるうとしている。

切なさが倍増しそうなそんな色を見ていたら、またまたきゅっと胸のあたりが痛んだけれど。

2月を迎えたばかりのその日、聡明は言葉少なで、上の空っぽだった。

雑談にも乗ってこなくて、いつもよりもきちんと勉強を進めようとする。

でも、どうしても訊いてみたいことがある、里奈は聡明に尋ねた。

数日間、考えて考えて、どんなに考えても答えが導けなかったことについて。

「センセ」

「なんだ」

「ゲイってホモと同一語？」

好きなひとにこんなことを尋ねてしまうあたり、里奈もなんだか情緒不安定だ。

聡明の目が半分になった。

ただでさえ細いので、そりゃもうかなりの細さ。

「んなもん、辞書ひけ、辞書」

「ひいたよ」

「なんて書いてあった」

ホモ

(英homoは英homosexualの略) 同性愛。普通、男性
同士のものをいう。また、それを好む人。

ゲイ

同性愛者、ゲイ；(特に) 男の同性愛者。gayは男女とも
に用いられるが、特に性別を明らかにしたい場合はgay(男性)
またはlesbian(女性)を用いる。

Microsoft/Shogakukan Bookshelf
Basicより

辞書を突きつけると、聡明はしばらく眺めてため息らしきものを
つけた。

「充分じゃねえかよ」

返された辞書を抱えながら、里奈はさらに聡明を見上げる。

その上目遣いに聡明はまだあんのかと目を据わらせる。

「ゲイでも、ホモでも、レズでも、好きだっていう気持はおんなし
だよ」

「だろーな。俺はそうじゃねえからわかんねえけど」

「不思議と気持悪いって思わないんだ」

「どーゆーことすつか考えるとえぐいぞ」

「？」

「悪かった。続けて、はい」

「……？ 好きになっちゃう相手が選べればいいのになって思う」
聡明が表情から笑みを消して、里奈を見つめる。

「マイナスが全然ないひとを選んで好きになれたらいいなあって思

うんだ。同性を好きになるってことはさ、奥さんいるひと好きになるのと同じような感じですか……このひとは安全って確認したら好きになるとかできないかなあ」

ソウメイのこと、好きになっちゃったりしたジブン。

絶対叶わないってわかってるけど、好きで好きで。

「若干違うけど、まあ、禁忌としちゃ、同じだよな、ゲイも不倫も近親相姦も」

聡明は力なく呟く。

「惚れる相手を選べたら苦労しねえよ。よりによってって相手に惚ちまうもんなだろうな。やめときゃいいんだけどな、そうもいかねえんだよな実際」

「聡明はそーゆーのわかるんだ」

「わかるよ」

短い答えの後、ぽかんと参考書で頭を叩かれた。

「雑談終了」

「聡明、オトナダネ」

「ああ、ぴちぴちの24歳だからな」

「げーっ、その目で24歳かあ」

「うるせえぞ、コラ!? さっさと問題読め! 解け! ナマイキがきんちよの分際で俺をおちよくろうんなぞ、1万年早いんだよ、ボケ!」

「1万年も生きられなーい」

「その減らず口で、カメ並みに長寿だよ、お前は」

聡明とふさげること、勇気をもらう。

かまって欲しくてやりすぎた言葉に後悔するのは今日はやめる。

きつと大丈夫、

傷ついても後悔しても、あたしは立ち直れる。

聡明が笑ってくれたら、頭をぼんぼんってやってくれたら。それだけで元気になれるはずなんだから。

親友の奈津美が好きな男の子。

本当に真崎英彰が里奈を好きだとしたら？

それを思うと、いいようもなく憂鬱。

これから起こるであろう、複雑な出来事を想像するだけで気分が沈みそうになる。

里奈の気持が彼に向いていないとはいえ、それだけでは済まされないだろうことはなんとなく想像がつくし。

たくさんのひとの気持ちを向けられているのに、涼しい顔で英彰はそこにいる。

ないものねだりを誰もがしあっているよう。

点と点は線になるのかな。

それがあるとしたら、誰と結ばれるんだろう。

あたしは誰と線を結べるのだろう。

そんなことを考えながら、里奈は放課後、帰り支度をしている英彰の机に歩み寄る。

顔をあげた英彰の顔に驚きが浮かぶ。

まさか里奈から言葉をかけられるとは思わなかったのだろう。

「部活、何時に終わるの？」

「遅いよ、かなり」

「話があるの。終わるの待ってるから」

英彰はしばらく黙ったままで、ややあつてかすれた声で言った。

「サボるよ」

「いいよ、そんな、それは……」

「偶にはいいよ」

奈津美の視線が気になった。

裏切っているわけではないのに、なぜか後ろめたい。

そして、これから英彰に言わなければならぬ事も重すぎて、里奈の顔も自然とこわばってくる。

「人にきかれたらヤバイ話？」

頷くと英彰はコートを羽織った。

「どこ行く？ 生物室なら鍵かかってないけど。屋上は寒いだろ」
里奈にしか聞えないような声で英彰が言う。

英彰の一步あとを里奈はとぼとぼと歩いている。

生物室は特別教室なので、別館の4階にある。

本館2、3、4階はクラス教室で、特別教室は渡り廊下で繋がる別館にある。

今、別館は文化部の生徒たちでにぎわう時間帯だ。

そんな彼らの視線をわずかに集めながら、英彰は階段を昇っていく。里奈は英彰から距離をおくことにした。

生物教室に行けばいいんだから、いつしよに歩くことは……ないんだから。

さすがに4階になると人影もない。

彼から5分ほど遅れて生物教室のドアを横に滑らせると、英彰が実験卓台の上にバッグをおいてその隣に座っていた。彼の足は椅子の上へのせられている。

「誰もいなかったんだ」

「4階は部活でも使わないから」

緊張感。

里奈は英彰から距離をおいている自分に気がつく。

悔しいけれど、彼の事を怖がっている。

二人きりで教室にいるには、ちょっと怖い相手だ。そんなことを思うのは失礼かもしれないことはわかっているけれど、どうしても身体が逃げる。

教室の入り口、ドアに寄りかかったまま、里奈は英彰を見た。

相手はずっと里奈の事を観察していたようで、そこから動く事がないことに肩をすくめたりしている。

そんな重い空気のなか、口を開いたのは英彰だった。

「話って？」

「うん……」

口籠もる。

どういえばいいのか、言葉を捜しながら里奈は視線を落とす。

「畠山先輩と一緒に帰ったりするの、やめたから」

英彰は軽く流すように頷く。

ふうん、それで？

そんな眼差しを送ってくる。

「何があつたのか、聞いた」

「……」

英彰の眉が寄せられた。

不快と戸惑いを混ぜたような、そんな顔をしている。

「先輩、真崎が許してくれなくても仕方ないみたいなこと言っただけど、本当は許して欲しいんだと思う」

英彰の顔を伺うと、とても冷たい目。

「許して……あげようよ。先輩、受験生だし」

「お前は？」

「え？」

「お前は俺の事まだ怒ってるんだろ？ 顔も見たくないんだろ？
なのにそういうこと言うんだ」

「……」

英彰はスクールバッグを掴む。ひょいと足を床につけて、台から降りた。

彼の歩み寄る気配に里奈は身を強張らせる。

英彰はまっすぐに歩いてきて、里奈の前で足を止めた。

「そんなにびくつくほど嫌ってる人間を説得しようとするなんて、随分あの人に同情してるんだな」

「そんなんじゃないよ」

里奈の声は弱い響き。

対照的に英彰は明らかに気分を害した様子の、強い声。

「お前が俺がやった事全部許せるなら俺だってそうできる。お前ができないなら俺も無理だよ。そうだろ？」

言われて里奈は唇を引き締めた。

そうしていないと涙がこぼれてしまいそうだから。

あまりにも正論すぎて、返す言葉がなかったから。

無言のまま、英彰がドアに手をかけ、里奈の傍らをすぎようとする。

「真崎」

英彰が足を止める気配、里奈は彼から顔を隠すようにつつむいたま
ま、

「嫌いだって思ってるの、嫌だけど、仕方ないじゃない。あんたはサイテーのことばかりしてきたじゃない。でも、好きな人に嫌われ
てるとしたら、あたしだったら耐えられないから、先輩だっている
いる考えたり、悩んだりしてて、それでも真崎のこと、好きだから
そんなの男だから女だからとか、関係ないじゃない」

「好きなら本気なら、なにしてもいいってわけじゃないってこと、
お前が一番わかってるんじゃないの？」

「それは、先輩は、本当に真面目に……！！」

「俺だって真面目におまえの事好きだよ」

言われた言葉に里奈は息を飲んだ。言おうとした言葉もどこかに消えてしまうほど、驚いた。

呆然と英彰を見上げると、

「無神経だよ、おまえは」

言い捨てて、歩き出す。

彼が教室を出て行った後、里奈は口許を押さえた。

悔しかった。

英彰に対してのどうしようもない感情が胸の奥からせりあがってくる。

話に耳を貸そうとしない頑なさとか、こんな時にあんな冷たい顔を
して、好きだなんて言い放つ身勝手さ。

「自分の事棚に上げてるのなんかわかってるよ!!」
あんだだっ 棚に上げてるくせに!

許してあげて欲しかった。

許すと言ってくれたら、自分も許せたかもしれないなんて、期待していた。

そんな浅はかな自分も悔しすぎる。

許すなんてなんて高飛車な思いあがり。

好きだなんて言葉がこんなに冷たいなんて知らなかった。

冴えない気分で家に帰ると、里奈は時計を見た。

聡明がやってくる時間まで一時間足らず。

母親が夕食の支度をしていて、キッチンから何か言ったけれど、里

奈は返事をせずに階段をのぼる。

制服を脱いで、私服に着替えた。

鏡に向かって三つ編みにしてある髪をほどく。

そして、丁寧にブラシで梳いた。

「里奈ちゃん、入るわよ」

「……」

短いノックの後、母親が顔をのぞかせた。

「都村先生、今日、都合で来られないらしいの。代わりに同じ大学の女の先生が来て下さるって本人からさっきお電話をいただいたんだけど、いいわよね？」

手をとめて、里奈は鏡に映る母親の姿を見つめた。

「……聡明、こないの？」

「うん、なんか怪我をされたんですって」

振り返って母親を見つめた。

「けが？」

「お母さんも詳しくは聞いていないんだけど……ええ」

娘の顔色が蒼白に近いものになって行く様に、母親が怪訝そうな表情を浮かべる。

「里奈ちゃん？」

「どんなけが？ ひどいの？」

「わからないの。代わりの先生に伺ってみましょ」
母親が静かにドアを閉める。

独りになって里奈は口もとに手をあてた。

一点を見つめているはずの焦点が上手く合わなくて、里奈は持っていたブラシを床に落とす。そして、口許に当てられている手に、もう片方の手を重ねた。

「……けが？」

英彰に傷つけられた事なんてどうでもよくなっていた。

聡明が怪我をした。

ここに來ることができないなんて、絶対に大きな怪我のはず。

聡明は今まで欠勤のない先生だった。

体調が少しくらい悪くても、里奈にうつるとかいう心配がなければきちんとやってきていた。

「先生、いらしたわよ」

階下から、母親の声。

ややあつて遠慮がちな部屋のノックが聞こえて、姿を見せたのは浜崎佳乃だった。

彼女の姿を見た時、一瞬頭に血が昇った。

後でその感情が嫉妬だったと気がついたが、その時はその嫉妬に振りまわされてしまっていた。

とてもキツイ目で彼女を見てしまった。

佳乃はそんな里奈に静かに微笑みかけて、

「ごめんね、都村くん、都合でわたしが代打を頼まれたの。1ヶ月くらいで復帰できると思うって言ってたから、その間わたしで我慢してね。聡明が戻ってきた時にびっくりするくらいがんばろうね」

「1ヶ月？」

「うん」

「聡明に何があつたの？ 怪我って何？ ひどいの？」

次々と浴びせられる質問に佳乃は困ったように口許を歪める。

「実験中に……事故にあつたの。右手と脛のあたりをやけどしてしまつて……入院してるの今」

自分の脛の上を指でさしながら佳乃が言う。

入院と聞いて、涙があふれそうになった。

目頭がふつとあつくなるのは涙が溢れ出す寸前のことだ。

それを必死でこらえながら、表情を変えずに里奈は尋ねた。

「どこ？ 病院、どこなの？」

泣出す寸前のかすれ声を出す里奈に、佳乃はわずかな驚きを瞳に浮かべる。

「……Y総合病院」

「何号室？」

「えっと……里奈ちゃん？」

「いいから教えてください」

佳乃が教えてくれた病室の番号を里奈は口の中で繰り返す。

何度も何度も、祈るように。

それからの里奈はまったくいいほどに上の空だった。

佳乃は丁寧に勉強を覚えてくれたのかもしれないが、里奈はそれから彼女と言葉を交わせずにいたし。

聡明が大変な時に頼ってもらえる人。

そんな立場にいる佳乃がうらやましくて、腹だたしくて。

そういう想いに頭の中を支配されていたから。

返事すら、上手くできなかった。

最低。

翌日、教室でぼんやりとしていたら、遠藤教諭に呼び出された。

その声をかけられたのが珍しく英彰だった。

英彰に手招かれた里奈は素直に立ちあがり、わかったと答えた。

そして、黙って英彰の隣を歩き出す。

英彰からすれば、昨日の今日なのでとげとげしい空気があつて当然と思っていたのに、里奈からはそんなもの微塵も感じられず、かといって好意的なものは皆無で。

「…………ヘンだぞ？」

「寝不足なの。昨日よく寝てなくて」

「…………寝不足？」

「あんたのせいじゃないから。昨日のことはもういい。余計なこと言った私が悪かったって思ってるから」

英彰が伺うように見つめてくる。

視線をそらして里奈は彼に言った。

「ごめんね」

「…………おい」

拍子抜けしたような顔で英彰が足を止めた。

そして肩を掴まれて里奈も足を止める。

「なに？」

「なにつて…………俺が訊くのもおまえからすれば余計なお世話なんだろうけど」

「わたしそんなにヘン？」

「俺と普通に会話してるあたり、絶対ヘンだ」

言われて里奈は溜息をついた。

正直言つと、はる意地もないくらいに消耗していた。

「具合悪いの？」

心配そうに英彰は言う。

昨日の冷たい目つきが嘘のよう。

それを見たらなぜか切なくなってきた、里奈は唇を軽く噛んだ。

「そうなら、休んでろよ。遠ちゃんのところには俺1人で行つてくるから。もしかしたら放課後に仕事頼まれるかもしれないし」

「大丈夫、そんなんじゃないから」

大好きな人が怪我をした。

逢えなくて、心配で、悔しくて。

そんな感情に苛まれる自分が惨めで。

本当は今すぐに病院に行きたい。
姿をひとめ見たい。

いたわるように英彰が見下ろしていた。

里奈にはそれがとても不思議にものに思えた。

怒ってみせたり、こんな風に優しくしてみせたり。

そのうちに彼は前を見て、再び足を進めた。

里奈はその後をついて行く。

なにげなく視線をやった廊下の窓。

今にも泣出しそうな曇った空。

低くて低くて、押しつぶされそうな程に近い。

ここ数日、やけどを負って入院しているという聡明の事ばかり考
えている。

こんなに誰かのために情緒不安に陥るなんて思わなかった。

授業中、数学の教科書をめくる。

半年くらい前に聡明に教えてもらった問題を見つけた。

聡明の文字がそこにはあって、ついでに落書きもしてあって。

そんなふうに聡明の文字を探してページをめくっていると、涙がこ
ぼれそうになる。

お見舞いに行こう。

一応教え子なんだから、お見舞いに行ってもおかしくないはず。

制服姿を見られるのは絶対に嫌だけれど、聞けば聡明は両目に包帯

を巻かれています何も見えないらしい。
放課後、家に帰らないで逢いに行こう。

いつも一緒に帰っている奈津美には、正直に聡明のお見舞いに行くのだと言って駅で別れた。

「お大事にして伝えてね」

奈津美は心からそう言っている様子で、彼女が優しい子であればあるほど後ろめたい気持ちになった。

里奈が聡明に焦られるように、真崎英彰のことで一喜一憂して、片想いに微笑んだり悲しんだりしているはずだと思うと。

彼女の片想いの相手に告白されたからといって、同情するのは思いあがりも甚だしいとは思う。でも、憂鬱になってしまつのも事実で。

駅の階段を奈津美が昇って行く。その後姿を眺めていたら、奈津美が振りかえって笑顔で手を振ってきた。

「元気だしなよ　!!!」

うん、と頷いて里奈も笑顔で手を振り返す。

真崎はバカだ。

あんなにいい子に好かれてるのに、あたしみたいな可愛くない子に好きだなんて言うて。

ホント、見る目がないと思う。

目が見えない人にお花を持っていっても仕方ないしとあれこれ悩んで、聡明が意外と甘党だった事を思い出した。

駅前のケーキ屋で聡明が好きなお菓子をかう。

里奈の足取りはとても不安定で、舞いあがっているというか、とてもとても緊張している。

聡明の病室はすぐに見つけられた。

さすがに午後の夕方間近の時間外来の人が多い。

聡明はどうやら個室のようで、名前が一つしかなかった。

ドアは開けられたまま、すぐむ足をやっとの思いで踏み出して、そつと覗くと聡明がいた。

病室には彼1人。

両目を包帯で覆われていて、顔の半分が見えない。

包帯の白さが痛々しくて、里奈は息を飲んだ。

ホンモノの聡明がいる。

そう思っただけで心臓が爆発しそうな勢いで動きだすから、始末におえない。

ベッドの上で聡明は身動きをせずに、指を口許に寄せている。

引き締められた口許から察するに考え事をしている様子だった。

声をかけたいのに怖くて、病室に入れなくてドアのところであうろしてしまふ。

はやくはやく、逢いにきたよって言いなよ。

なにやってんのよ、怪我なんてして聡明もどんくさいよね、とか、いつものナマイキがきんちよやって、はやく聡明のそばに行こうよ。ふと、足を止めて里奈は改めて彼の姿を見つめる。

目が見えないってことは。

わたしだってわからないよね。

里奈はもう1度息を飲む。

こうして改めて見つめれば見つめるほど、心から想う。

好きだよ、聡明。

里奈は無言のまま、ベッドに歩み寄る。

ようやく気配を察したのか、聡明が里奈のほうに顔を向けて、戸惑ったように言った。

「……誰？」

本当に見えないんだ。

本当に。

そうめい、と声にしないで呼びかける。

そうやって彼の名前を呟いた唇で、彼のそれに触れた。

<5> 卒業の意味がわかりますか

唇が一瞬だけ触れて、我に返った里奈は飛び退いた。

「おい、ちよつと?!」

さすがの聡明も驚いたらしく、慌ててベッドから降りてきた。やばい、絶体絶命! ばれたら切腹もんの大問題。

それからはもう、逃げた逃げた。

でも、病室の入り口に張り付くようにばつが悪そうな顔の佳乃がいて、心底驚いた。

見られた! と思っただけで恥ずかしくて、ますます動転、赤面は当然。とにかく、逃げた。

病院の廊下を全力疾走なんて非常識な事をしてしまった。

病院を飛び出してからも里奈はしばらく走った。

足を止めたのは、疲れきって足と心臓がギブアップしたからだ。

へたり込んだその場所は、交通量の多い大通りの歩道橋のそば。

肩で息をしながら、呆然と里奈は自分のやってしまった事を反省する。

好きという気持が暴走しちゃった。

どうしよう。

たくさん不安が胸を去来するなかで、ふと、里奈は思う。
大好きな人とキスできたのに。
どうして、全然嬉しくないの？

「里奈ちゃん、ご飯いらないって、どうしたの？」

「なんか食欲なくて」

そんな風に適当に言葉を濁して部屋に行く。

制服から部屋着に着替えて、ベッドに横になった時、ノックの音がした。

母親が顔を見せる。

「かぜでもひいたの？」

「ううん、大丈夫」

放っておいてよ、お願いだから。

顔をあげようとしない里奈に母親はさらに言葉をかけてきた。

「学校で何かあったの？」

里奈は枕に顔を埋めて、こみ上げてくる苛立ちをもてあまし始める。

「里奈ちゃん、ねえ、里奈ちゃん？」

「うるさいのー!!」

里奈ははじけたように身体を起こして、母親に向かって叫んだ。

「なんでもないって言うてるでしょう？ いいから独りにしてよ！

！ 出ていってっいたら!!」

母親が目を見開く。

相当驚いたらしく、ごめんね、とかなんとか呟いて出ていってしまった。

その後の静まり返った部屋で、里奈の胸にやってきたのはどうしようもない後悔。

たぶんこの世で一番サイアクな女の子だ、今のわたしは。

魔法の杖も消えちゃった。

「野々村が休んでる？」

「うん。かぜだつて」

英彰は主の居ない机を見た。

椅子がしまわれたままのそれは、ぽつんとそこにある。

奈津美は溜息をつきつき、

「里奈の家庭教師の人が怪我しちゃって入院したらしくて、お見舞いに行つたんだよね、昨日。病院でうつされちゃったのかもしいね」

表情を止めて、英彰は改めて奈津美を見下ろした。

「家庭教師が入院つて？」

「里奈詳しいこと言わなかったからわからないけど……里奈かなり心配してて、里奈のほうに心配だったって感じ。放課後行ってみようと思つてるの」

「そっか」

英彰が話しかけてくることなんてめつたにないので、奈津美は少しばかり饒舌になっている。

彼との会話を引き伸ばしたくて、思いついたことを言葉にしてしまった。

「真崎も行く？」

英彰は軽く笑つて、首を横に振つた。

「俺はいいよ。その家庭教師俺も知ってるんだ。怪我したなら見舞いに行きたいんだけど、病院どこかわかる？」

奈津美は首を傾げながら、

「Y中央総合病院。そこ、うちのお母さんが働いてる所なんだ。だから聞き間違いはないよ」

「サンキユ」

英彰は軽く笑って背を向ける。

そのまま教室を出て言ってしまう姿を見つめて、奈津美はそっと口許を引き締める。

本当は訊きたいことがあった。

英彰の噂。

大学生の彼女がいるってホントなの？

本当は里奈に話して慰めて欲しかったのに、こここのところ里奈のほう元気がなくてどうにも言い出せない雰囲気だった。

里奈のあの元気のなさを見るたび、胸が締め付けられるようだ。

「こんな時頼ってくれないんだもんね……里奈は」

放課後、部活をサボった英彰は、聡明が入院しているという総合病院へと足を向けていた。

受付で確認するとあっさり聡明の所在が明らかになり、病室辿りつくのはあっけない程に簡単だった。

半分開かれたドアを覗くと、ベッドに横になっている人間が見える。申し訳ない程度のノックをすると、頭が動いた。

「はいつてまーす」

「……それは見りゃあわかりますけど」

両目を包帯で覆われた聡明は、よっこらせと身体を起こして、手招く動作。

「ごめんな、声だけじゃよくわかんねえんだ、どちらさま？」

「真崎です。寝てていいですよ」

「真崎って、フランス料理屋の御曹司の真崎くん？」

どうにも調子が狂う言い方ばかりする。

英彰は苦笑いしながら、ベッドに歩み寄る。

「そうです。具合はどうですか？」

「明日退院するんだ。この包帯も今日で終わり。右手のほうはまだ

まだ無理できねえけど……来てくれて嬉しいけどさ、どうしてわかつた？ 俺が入院してるの」

「野々村の友達に聞いたんですよ」

「がきんちよか。あいつどうしてる？」

英彰はきよとんとした。

「あいつ来てないんですか？」

聡明は軽く笑って、頷いた。

「ああ。まあ、見舞いになんて来なくてもいいけどさ。今日の午前中にあいつのお袋さんが来てくれたし。どうした？」

黙ってしまった英彰に聡明は怪訝そうな顔。

英彰は英彰で昨日来ているはずの里奈のことを考えていた。

何があつたかは知らんが、何かあつたのだからと見当をつける。

すると、わきあがる相反する気持。

ざまあみろと思う半分で、何があつたんだらうと胸を痛める。

自分でバカだと思う。つくづく。

「あの子どしてる？」

「え？ はい？」

突然呼びかけられて、英彰は我にかえつた。

そんな英彰の慌てた返事に聡明が小さく笑う。

そして、からかうような口調で言った。

「考え事？」

「いえ」

「従姉、どうした？ イワサキとか言った……」

「玲子ですか？」

「うん。がきんちよつれて途中で帰ったから。大人気ないことしたから気になってたんだ。すぐ頭に血が昇るから、俺」

自嘲ぎみな笑みを浮かべる聡明。

それを英彰は静かに見つめた。

「都村さんでもカツとくことあるんですか？」

「あるよ。俺、そーゆーのばっかださ。身体動かすのも殆ど勘だし。」

最近は行動を起こす前に、いつペン考えなきゃなあと思ってるわけよ」

「……話聞いてもらっていいですか？」

英彰の言葉に聡明が、ん？ と首を傾げる。

確かに俺はこの人の器には到底かなわない。

たけど、あいつも絶対に振りかえってなんてもらえない。

惚れる相手に背伸びしすぎだよ。

病室の白い壁。

聡明の目を覆っている白い包帯。

白い、白い、シーツの白。

ベッドの傍らに置かれた椅子に腰を降ろして、英彰は天井を仰ぐ。

溜息が唇からもれた時、天井までもが白いことに気がついた。

聡明が言葉を待ってくれている。

「尊敬というわけじゃないけど、それなりに好感を持っていた先輩
いて。俺、一年の時から可愛がってもらってたから、かなり懐いて
て。全面的に信用していたんです。あの人には誰にも言わないだろ
うことも、ペラペラ話してて。進路のこととか、家のこととか」

「うん」

「でも、その人、俺に恋愛感情持ってるらしいです」

「オトコだよな？」

「はい」

「ふうーん……。真崎くんは困っているわけだ」

いや。と英彰は首を横に振った。

「どっちかというと、腹がたつてるというか。恋愛感情があったか

ら今まで可愛がってくれてたのかなとか考えたら、今までの俺がアホみたいだなって。裏切られたような気がしてるっていうのが一番近いかもしれないです」

たった3度顔を合わせただけの人に、深刻なことを話している自分が信じられないが、都村聡明ならなにか明解な答えをくれるのではないかと英彰は思う。

答えは無理でも、なにかのヒントを。

「裏切られたかあ……耳が痛てえな」

言って聡明は笑う。

「別に相手のことなんて考えることねえだろ。相手は自分のタブーをわかりすぎるくらいにわかっているだろうし。先輩って事は3年だろ？ 相手はもうすぐ卒業なんだしさ。真崎君が切りたいと思えば切っちゃえばいいし。追いかけてこねえよ。あと2年もすれば相手だって呵責のある過去くらいに気持の整理がついてるだろうし」

「……」

「でもさ、真崎君がそこまで腹がたつ程信頼できるようなイヤツなら、真崎君自身がそいつに未練があるんじゃないかねえの？」

英彰は眉をひそめた。

「俺、恋愛感情なんて持ってませんから。相手がそういう心積もりだったのに平気な顔できませんよ」

「別に相手が勝手に惚れてるだけなのに、真崎君まで合わせてそんなもん持てといってるわけじゃなくて。要は、真崎君がどうしたいか。その先輩とこれっきりで終わるか、どうか。人間として好きだつてのは、恋愛感情を持つてるやつからすればかなり卑怯なんだけどさ、もっと自分を出せよ。文句言っちゃえ。テメエのこと親友だと思っただのに何でだよってさ。言われちゃまったほうが楽なこともあるから」

「傷つきませんか、相手も……俺も」

ぼつりと英彰が言った言葉に、聡明は口許を緩めた。

「傷つく権利ってもんもあるんだよ。傷ついて立ち直る権利もな。」

勝手に気を回してそれを奪おうとするのはエゴだ」

「都村さん」

「俺はそのエゴをおしちまうから、ダメなだけどさ」

傷つく権利。

そういうものが本当にあるならば、それを望んでいる人間なんているのだろうか。

望まない権利なんて存在するのだろうか。

「限界ギリギリのトコでも見守ることが出来る人間はいちばん強いよ。そういう人間にはかなわねえわ、実際」

「俺には都村さんこそ強い人間に見えます」

「俺は全然。でもさ、強いつてことがベストってわけでもねえからな。心理学とか哲学専攻してればもう少し理解もできたかもしれないけど、俺はしがない建築屋なもんで、曖昧な感情論でワリイけど自分の弱さとか欠点を口にできない英彰は、それをさらりとできる聡明の強さを感じてしまう。

でも、相手は自分より7年も多く生きている。

7年前のこの人はどんなことを考えていたのか、ふと気になった。

卑屈になる事はない。

7年という時間は長い。

でも、ふと、訊きたくなつた。

7年の不在を利用して、大人である相手に子供として尋ねてしまおうと思った。

「都村さん、挫折したことありますか？」

聡明の目が見えたら、どんな色を瞳に浮かべただろう。

一瞬、引き締められた彼の口許が、頬が、苦笑に変わった。

「ザセツねー、あるさ、そりゃ。大ザセツ経験中よ、今の俺は」

「大ザセツ？」

聡明は自分を指差して、おどけるように言った。

「畳みかけるように不幸だよ、今」

「怪我……したからですか？」

「それもあるけどなー。でも、これはいいんだ。自分で納得してるから」

それよりもさ、と聡明は言っつて、からかいをますます強くする。

「ダメだぜえ、女の子泣かしちゃ」

「……」

「気持はわからないでもないけどさ」

クリスマス・イブのことをいっつているのだろうと思っつ。

そんなこと英彰にもわかりきっつてることだ。

でも、感情を全て抑えきれないから、ああいうことになる。

「泣かすといいことねえよな、ホント」

どこかしみじみ呟く聡明に英彰も素直に頷いた。

「ないですよ、ホント」

「オトコだっつて泣いてんのかなあ」

冴えない聡明のセリフに英彰は笑っつた。

その笑い声を聞いて、聡明も穏やかな顔になる。

聡明はなぜか手首をかえして、英彰に向かっておいでおいでをした。

「頭」

「頭？」

キョトンとして尋ねる英彰に、聡明はもう1度言っつた。

「頭かしてみ」

わけがわからないまま、英彰は身体を傾けて聡明に頭を寄せた。

近づいた気配を聡明は空の中で手探りをして、そして、見っつけた英彰の頭をぼんぼんとなせるように叩いた。

「がきんちよがさ、これやっつてやるとうれしそーな顔するんだよ。

元気でした みたいな。あ、今はどんな顔か見えねえから気にす

んなよな」

ぼんぼんとやっつてもらっつたところを自分の手でなぜながら、英彰は

なんだか照れくさいやらの複雑な感じ。

そうしてしているとドアをノックする音がして、軽やかな声が響いた。

「そうちゃん、ごめんね、遅くなっつて」

「そうちゃん、ごめんね、遅くなっつて」

優しげな顔立ちの女性が笑顔を覗かせる。

「べつに待ってねえよ、也美のことなんか」

彼女か？ と英彰が思った矢先、先回りしたように聡明が言う。

「俺のねえちゃん」

ねえちゃんと聞いて、ますます嬉しそうに微笑んで、その人は英彰に頭を下げた。

「弟がいつもお世話になってます」

「いや、とんでもないです」

いささか慌てふためいて英彰は会釈を返した。

似ていない姉弟だ。

顔だけは勿論、かもし出す雰囲気まで、全く異質。

「そうちゃん明日退院でしょ？ 午前中に退院しちゃうの？」

「うん」

「亜里沙ちゃん、来るの？」

「いや。俺、家に帰るから。上手いもん作って待ってて」

それを聞いたお姉さんは、不自然な程の驚きを瞳に浮かべた。

そして、飛びきりの笑顔になって、

「わたし、迎えに来る」

「いいよ、ガキじゃあるまいし」

帰ると告げるタイミングを逃したまま、英彰は二人のやりとりを見つめていた。

「いいですね、姉弟いて」

「ん？」

「俺、一人っ子だから」

俯いたまま、まあな、と聡明が呟く。

英彰はそんな彼らに軽く頭を下げて、病室を後にした。

外に出ると、すっかり陽が落ちていて、空気の冷たさに肩をすくめる。

ダブルコートポケットに両手を入れて、英彰は足を進めた。何時になく素直な気分だった。

敵わないことを見極めて、すっきりしたらしい。劣等感を感じなくて、里奈のことを思い浮かべることすらためらいもなくできる。

「あいつも結構ツライよな」

優しくしてやりたいと思った。

そうしたい理由も訳もあるけれど、なんだかとても不思議な感情。

優しくされたい時、優しくするのも悪くない。

「おしゃれしよう」

土曜日の午前中、起きて真っ先に思ったことはそれだった。図書館に行く気にもなれなくて、でも家にいるのもなんだか気持がふさいでしまいそうなので。

おしゃれしてお買い物に行く。

それは元気になりそうな提案だ。

桜色のマニキュアが欲しいなあと考えて、聡明を思い出した。

「俺はピンク系が好みだ」

聡明がそう言ったから、口紅もマニキュアもそういう色が増えた。ため息がついて出た。

「髪、切るっ」

ばっさりとじゃなくて、揃える程度に。

キスを盗んだ。

畠山の気持も、英彰の気持も。

あんな感じだったのかな、自制心がどこかにいっちゃうって感じ。全然嬉しくないし、空しいだけだし。

何時になく気合の入った格好で里奈は2月の冬空の中を闊歩する。ブーツのかかとかがかつかつ鳴っているあたり、かなり颯爽と歩いているはずだ。

美容室はいつもと違うところに行ってみることにした。

冬休みに、奈津美と冬期講習に通った予備校の近くで見つけた美容院が、実は気になっていたのだ。

ガラスの向こうで働く美容師達の髪型がそれぞれに似合っていて、とてもいい感じ。

髪を切ってもらったり、ブローしてもらったりしている間は、とても不安だ。

どんな風になっているのか、おかしなことになっていやしないか、とてもどきどきする。

でも、心地いいのも確かで、自分が綺麗になっていく気がする。鏡に映る自分の顔を眺めながら、ふと思った。

無理な背伸びしてるのかなあ。

外見も、恋も、気持も。

髪を切り終えて、里奈は予備校周辺の商店街をぶらぶらと歩いた。これからどこに行こうかなあと考えて、携帯電話をバッグから取り出す。

まだ時間は午後の2時前。

このまま家に帰ってしまうのももったいない。

かといって、友達を呼ぶのも煩わしい。

そんな事を考えていたから、とおりすぎる人間に敏感になっていた

らしい。

里奈は足を止めた。

相手もぼかんとして、5メートルほど向こうで足を止めている。

二人の間に例の妙に重い、緊張した空気が流れかけたとき、予想外のことが起こった。

「野々村じゃん」

笑顔で彼は歩み寄ってきた。

その笑顔に救われたような気持になって、里奈もほっと安堵の笑み。

「真崎、なにしてんの？」

英彰が里奈の前で立ち止まる。

見下ろしてくるから、思わず里奈は彼を見上げていた。

「俺は予備校の模試」

「模試？ 現役も混ざれるの？」

「うん。冬休みに申し込んでおいたんだ」

言いながら、英彰は里奈の姿をゆっくりと眺める。

そして、

「随分気合入ってるな。クラスの連中が見てもおまえだってわから

なそうだな。待ち合わせ？」

「ううん。髪を切りにきたんだ」

「コンナトコまで？」

「うん」

「へえ……」

髪を切ったと聞いて、英彰がもう1度しみじみと里奈の頭のあたりに視線を向ける。改めてそうされると恥ずかしくなってくるから、里奈は思わず手をかざした。

「切ったって言っても、揃えただけだし、染めた色だって学校仕様で地味に明るくしてるだけだし」

「染めてんの？」

「カラーリングしてるの」

「ふうーん」

「真崎みたいで地毛がそんな綺麗な茶色なら、こんな苦労しなくていいんだけどさ」

照れ隠しに慌てて言うと、なぜか英彰は優しく目を細めた。

「おまえってさ」

「なに？」

「なんでもない」

頭を振る英彰。

数日前に冷たい顔で告白した男の子とは別人のように思えるほど、今日の彼の雰囲気は柔和だった。

ほんのりと暖かいものがこみ上げるみたい嬉しさがそこにはあって、里奈の表情も柔らかくなる。

「真崎、わたし、ヒマなんだけど」

「ふーん。俺は腹減ってるんだけど」

「買い物したいんだけど」

「飯、食いたいんだけど。食ってからなら、荷物持ちでもなんでもしてやるよ」

里奈は肩をすくめた。

「マックでいいわけ？」

「今日まともな飯にしたい」

「なんで？」

「バイト料が入ったんで、リッチだから」

英彰が笑う。

それから二人で並んで歩き出した。

自然にそんな事ができたことに感動しそうになって、里奈は自分でも奇妙に思う。

向かい合ってコーヒーのカップを傾ける。

二人の間にあるのは、両手がぬくもる感覚にも似た、照れとくすぐったさ。

カップに口をつけながら、上目遣いで英彰をこっそりと眺める。

確かにキレイな顔してるわ。

まじまじと見たことがなかったので、思わず感嘆してしまう。眼鏡の奥のきれいな二重。瞳は髪の色と同じ茶色。まつげが長いのにどこか涼しげな印象を受ける目許をしている。

一般的に面食いとされている女の子には、堪らない素材かもしれない。

「面食いねー」。

面食いの定義ってなんだろう。

わたしは聡明のあの細い目が好きだ。

あの目が笑う。

それを想像するだけで、嬉しくなるし、ときどきする。

なのに目の見えないあのひとにキスなんてしちゃって。

それもかなり卑怯なやつ。

なんであんなことしちゃったんだろ、バレてないのがせめてもの救いだ。

バレたらどうしたらいいかわかんない。

そんな事を考えながら、はー、と溜息をついた里奈を英彰はしげしげと眺めて、

「俺、明日から野々村と普通に話せるわけ？」

「へ？」

「ガッコーでさ、話しかけたりとかしていいわけ？ まだ迷惑だったりしたらやめるからはっきりしといて」

「あゝ」

英彰が淡々と言うつから、里奈はこめかみのあたりを押さえて軽く唸った。

「あんたってわかんない」

「なんで」

「なんだって今日はそんなにさばさばしてんの？」

「おまえこそ、俺と飯なんて食っちゃって、そっちこそどーしたんだよって感じ？」

返す言葉もなく、里奈は俯いた。

英彰とのキス事件は思い出したくないが、怒っているのにも疲れた、というのがホンネ。

はつきり言ってしまうえばそれよりも、大きな悩みができたというか、悩み？

里奈ははっとする。

わたし、コイツに告白されたんだっ！

一気に目の前にいる英彰に対して申し訳ないという気持があふれてきた。

ごめん、忘れてた……なんて、我ながらひどすぎる。

ちらりと英彰を見る。

どうしてコイツは、告白しても返事すらくれない相手にこんなに冷静に接しているのだろう。

わかんない。

突然爆弾発言してみたり、冷たい顔を試してみたり、優しくなってみたり。

食事を終えた英彰が、コーヒーを一口飲んで、

「買い物どこに行く？ 俺、時間あるし、どこでも付き合っよ」
なんて言う。

わかんない。

真崎英彰、あんたって、ほんと、謎。

楽しかったような気がする。

英彰と一緒にいて、そんなことを感じた自分に里奈は驚いている。

家の門の前まで送ってくれた。

買い物袋を手渡されて「ありがとう」と告げたら彼は「べつに」とそっけなく答える。

窓越しに家の中からもれる灯りを眺めながら、英彰がポツリと言った。

「おまえんちはいつも電気がついてるんだな」

「？ 夜になったらつけるけど、昼はつけてないよ」

真面目に言っただつもりなのに、英彰は笑う。

「ちょっと、笑うとこじやないんだけど」

「いや、ゴメンな」

そんなふうにはひとしきり笑った後、里奈に手を振り、踵をかえした。

「明日、学校で」

「うん」

手を振り返しながら、里奈は彼が曲がり角へ消えてしまつまで見送った。

買った服をベッドに並べて、手持ちの服とあわせてみた。

勉強は全然しなかった。明日の予習さえもしなかった。

「偶にはいいよねーだ」

明日から、ちゃんとやろう。

明日から、ちゃんと。

2月の最後の家庭教師の日、浜崎佳乃が言った。

「来週、聡明が復帰してくるよ。右手の火傷が包帯とれたの」

聡明、と聞いて、鼓動が強くなった。

いろいろと複雑だけれど、聡明のことを考えない日はなかった。

この佳乃には例の現場を押さえられているという弱みもあって、なかなか素直になれないでいた。佳乃はそんな里奈に対して、大人の余裕なのか、笑顔を絶やすことなく丁寧に勉強を教えてくれる。

「だから、わたしが来るのは今日が最後なんだ。短かったけど……
こうして知り合えたのもなにかの縁だから、何かあった時はいつでも
も相談とかのるからね。これ、私の携帯のナンバーが書いてあるの、
よかったら持っててね」

そう言つて、佳乃は一枚の名刺を里奈に手渡した。
パソコンで自分で作っただろう、その名刺は薄いブルーの上品なもの。
の。

その名刺を里奈は机のいちばん上の引き出しにそっと収めた。

卒業式が近い。

畠山はなんだかんだと受験戦争にばっちり勝ちぬいて、今となつて
は余裕の風情。

ひとつ峠を越えて気分も晴れたのか、顔つきも穏やかになった。
笑った顔は相変わらずで、屈託がないけれど。

そんな畠山が里奈に電話をくれたのは卒業式の一週間前だった。
クリスマス以来、顔を合わせることもなかった岩崎玲子さんが一緒
で、あるうことが二人で里奈の家の近くまでできているという。

二人は高校時代に後腐れのないように、楔とばかりにやってきたら
しい。

そんな突然言われても迷惑だが、畠山の言葉があまりにも陽気な
ので、つい呼び出しに応じてしまった。

里奈の家から10分歩いたところにカラオケボックスがある。

受験戦争の勝者である二人は、ここで里奈を待っていた。

二人でどうしてココまで盛り上げられるのか。

おそろおそろ教えてもらった部屋のドアを開くと、畠山がモーニン
グ娘。さんの曲を熱唱していた。

「恋をしつてえー」

思わず目を疑ったが、畠山は実にノリノリで里奈の姿をみると、陽
気に手を振った。

「ありがとう、来てくれたのね。こっちに座って」
手招かれるままに里奈は彼女の隣に腰をおろした。

3年生は2月になると殆ど自由登校なので、顔をあわせることがなかったというほうが正しい。

久しぶりを見る岩崎玲子さんは、長かった髪を肩のあたりでぱつぱりと切り、ますます大人っぽくなっていった。

そして、案の定というか、この人はどこか一風変わっているらしく、その特色はすぐに現れた。

突然里奈に抱きついて、ぐっと頭を引き寄せたかと思うと、里奈の頭をかいぐりかいぐりと激しくなげながら、

「ごめんなさいね、本当にごめんなさい。ずっと謝りたかったんだけど、勇気がなくてできなかつたのよ。こんな弱虫なわたしを許してくれる？」

「……もー、いいです、なんでも」

脱力しながら里奈がつぶやくと、玲子は冗談よと、けるつとして言うので、ふつと真顔になった。

「あなたに謝りたかつたのは本当よ。こんな気持を抱えたまま高校を卒業しちゃうのはとても嫌だつたの」

「はあ……」

玲子は肩をすくめながら、ウーロン茶のグラスを傾ける。

「クリスマスのはあなたはあなたのこと見定めてやろうと思つてたの。あなたの姿は好ましいものだったから、中身はいかがなものか興味があつて。でも、あなた最強の助っ人連れてくるんだもの」

最強の助っ人。

聡明の姿を思い浮かべて、里奈の気分が少し沈む。

それにあわせたかのように玲子は溜息をついて、物憂げな顔をした。美少女だけにそういう表情は周囲を圧倒する威力がある。

思わず見つめてしまった里奈の視線など気にもせず、彼女はつぶやいた。

「我ながら従姉弟に対する愛情は異常だわ」

従姉弟って真崎英彰？

畠山が知らんふりで熱唱を続けている間、玲子はそれっきり口を閉ざしたままだった。

カラオケボックスでそれから、1時間ほど遊んだ。

それからファミレスで夕食を食べることになり、3人は同じテーブルを囲んでいる。

玲子はとてもとてもハイなご様子で、畠山はマイペースにタバコをふかしている。

「高校生活中になにやった？」

玲子の問いに畠山が首をかしげながら、

「バスケに勉強に……いろいろだな」

「高校卒業するのと一緒に、卒業したい業もあるのよね」

「俺もあるよ」

そんな会話を交わす二人を見つめながら、里奈はぼけっと空を見る。入学したばかりだと思ったのに、もう3年生になっちゃうんだなあ。いよいよ受験生だ。

玲子はキラキラした目で里奈を見つめる。

「英彰のこと、よろしくね」

「な、なんでわたしによろしくするんですか？」

「英彰はすごくさびしがり屋なのよ」

玲子はコーヒーマシンのカップを見つめながら、寂しそうに笑った。

「あの子、子供の頃からずっと独りで過ごすことが多くて。両親がレストランの仕事にかかりきりだったでしょう？ 学校から誰もいない家に帰って……1人で夕食を済ませて、お風呂に入って、寝るの。おばさん……って英彰の母親のことなんだけど、彼女の代わりに家事をやって。ただいまを言う相手もいなければ、おやすみを言う相手もないの。言う相手がないってことは、お帰りを言ってくれる人もいなかったし、おやすみと答えてくれる人もいなかった

つてことよ」

英彰の横顔を思い出した。

買い物に行つて送つてもらつた時、家の灯りについて言っていたこと。

母親が家でおかえりなさいと言つてくれることが当然である里奈には、家の灯りが夜になつてついていいることなんて当たり前のことだから、彼の言葉の意味の深さがわからなかった。

「子供の頃はクリスマスはいつもわたしの家にいたわ。でも、それも中学になるまで。よつぽと寂しかったみたいね、自分から店の手伝いをするようになった。それでも普段は学校とか塾とかあるから手伝わせてもらえないみたいだけど。英彰はそんな子なの。とつても不器用。だから心配」

畠山は無言で玲子の言葉を聞いている。

溜息をつきながら、玲子は続けた。

「卒業しなきゃね、わたしも。わたしが心配したところで英彰には迷惑なだけなものね」

「おまえならできるさ」

畠山がつぶやくように言う。

でも、この声には労わりがある。

「ハタケは？」

「わかんね」

「難しいね」

「ああ。簡単じゃないな」

英彰は結局あのまま、畠山を避けているらしい。

気持はわからないでもないけれど、過去に慕っていたというだけに、畠山にとつても、英彰にとつても、寂しすぎる。

このまま、卒業なんて。

「悲しい思いさせて、ごめんね。でも、英彰も辛そうだったの。あ

のときは……謝っても傷つけた事は消えないけど」
玲子が里奈に言う。

妙に切なくて、切なくて、里奈は頭を振るしかできなかった。

真崎英彰を中心にいろいろなひとが心を傷めている。

当然英彰本人もそれなりに傷ついて、悩んでを繰り返しただろう。

委員長&副委員長コンビで、親友が恋している、頭が良くて容姿の整った男の子。

今までのところはそれが里奈から見ての彼のポジションだった。

それが微妙にずれて、ずれて。

わたしのことが好きだという、男の子になった。

親友が好きだということを知っているだけに、とても微妙な相手。

彼の気持には今のところ応えることはできない。

なぜなら、好きなひとではないから。

なぜなら、親友の好きなひとだから。

でも、とてもとても近くにいるような気がする。

それだけ彼との間にはいろいろあった。

あんなにも大嫌いと思いつながら、こんなにも考えさせられた相手は、
聡明のほかには彼だけ。

わからないけれど、不思議な存在。

卒業式のその日はまだ寒さを残しながらも、澄んだ青い空が広がった。

畠山や玲子や、そのほかにいろいろとお世話になった先輩とサヨナラを思うと、根が生真面目な里奈はどうにも涙腺が弱くなつて困った。

「卒業式の仰げば尊しって、それ泣け　　ッ！　って感じだよね」と、いささかドライに奈津美が言う。

でも、それ泣け　　！　の術中にまんまと引っかかっていた里奈は赤くなつた鼻を押さえて、奈津美の背中を軽く叩いた。

「ごめんね、仰げば尊しにやられちゃって」

講堂に響く、仰げば尊し。

みんなどんな気持で聞いているんだろう。

式典が終わって、HRが済んでの正午前。

卒業生はそれぞれに校庭に出て、帰る様子。

そんな彼らをイロイロな思いで引きとめ、写真を撮ったり、記念の品をねだったり。

玲子を探すと、彼女は数人の女の子に囲まれて、華やかな笑顔を振りまいていた。

「制服のリボンはあげられないの。ごめんなさいね」

声をかけ辛くて、里奈が遠巻きにそれを眺めていたら相手が気がついた。

玲子のほうから歩み寄ってくる。

「野々村さん」

里奈は頭を深く下げた。

「ご卒業おめでとございます」

「ありがとう」

卒業証書を片手に玲子は微笑む。

「ハタケのところに行く？」

里奈は笑って肩をすくめた。

「畠山先輩もいろんな人に囲まれてて、ネクタイもボタンも、制服の上着もなくなってます」

「そうなの」

そう遠くないところで、畠山がバスケット部の男女とりどりの後輩たちに囲まれている。

ふと、玲子の顔から笑みが消えた。

「ねえ、見て」

腕をつつかれて、里奈は玲子の視線を追った。

英彰がいた。

英彰は無表情に近いそれで、畠山に歩みよって行く。

「行くわよ！」

「え？ ええっ?!」

腕を掴まれて突然ダッシュされて。里奈は玲子に引きずられるように走った。

「先輩」

目の前に現れた英彰の姿に、畠山の顔が笑みが消えて行く。

英彰はわずかに目を眇めながら、どこか怒っているような顔。

最後の最後にその顔はなんだ、真崎！

里奈ははらはらしながら、玲子に小声で尋ねた。

「まさか、最後にケンカ売る気なんじゃないですよ？あいつ」

「そんな事するわけないでしょ！ 黙って、声が聞えない」

「ハイ……」

英彰は深呼吸をする。

そして、そつと睫毛を半分伏せて、ゆっくりと開いて、顔をあげた。

「ご卒業おめでとございませう。2年間お世話になりました」

「……」

「新天地でのご活躍を祈ってます」

畠山の固まった表情にゆっくりと笑みが広がっていく。

「ありがとう」

英彰が言葉もなく頭を下げて、立ち去ろうとする。

畠山が静かに言った。

「悪かったな」

「何の事ですか？」

表情も変えずに眼鏡の縁を押し上げた英彰は、そのままもう一度畠山に頭をさげて、今度こそ歩きだした。

畠山はその背中をしばらく眺めて、やがて振り切るように視線をそらす。

里奈は呆然として、親しげに言葉を交わした後で別れた二人の様子を見つめていた。

「……やった！」

と、玲子がらしくもなく拳を固めて呟いたので、我に返った。

玲子はよほど嬉しかったらしく、頬を上気させて、自分の制服の襟元についている赤いリボンを外した。

「誰にもあげないつもりだったけど、あなたにあげる」

「え？」

里奈はリボンのせられた自分の手のひらを見つめた。

「そのリボンの価値は高いわよ。利用できる時は利用しなさい」

「先輩？」

「わたしも英彰から卒業する」

驚きで眼を見開いた里奈に玲子はとても綺麗に微笑んだ。

「ありがとう」

どうして、わたしにこの言葉をくれるのだろう。

わからなくて、思わず英彰の姿を探した。

「あ」

英彰が人の輪から離れていく。

里奈はそんな彼の背中を追かけた。

「先輩、ごめんなさい！」

玲子が頷いて手を振ってくれた。

英彰を捕まえられたのは昇降口の下駄箱の前だった。

殆どの生徒がすでに下校していて、がらんとしている。

「マサキー！」

振りかえった英彰は里奈の姿に目を止めると、足を止めて待っていてくれた。

「なに？」

ようやく追いついて肩で息を切らしながら、里奈はその問いに困ってしまった。

なんて言えばいいのか、衝動的に追かけてきてしまったのだから。こうなったら正直に言ってしまう。

「……よかった」

「え？」

「よかった。真崎が先輩と話してるところ見てほっとした」

英彰は肩をすくめて視線を落とした。

「見てたんだ」

「じめん」

「いいよ謝らなくて」

里奈は頭を横に振った。

英彰も言えたのだから、わたしも言えるはず。

知らずのうちに玲子からもらったリボンを握り締めていた。

「ごめん、真崎。大嫌いって言って」

英彰の顔をそつと伺うと、信じられないというような顔で里奈を見つめていた。

わずかに見開かれた目が、やがて眼鏡の奥で優しく和む。

なんとも照れくさい状況に里奈は、1トーン高い声で捲くし立てた。

「でも、でも、好きって訳じゃないからね！ 絶対に違うからね！」
和んでいた英彰の目が一転して、眇められた。

「そこまで言うか?!」

「だ、だつてさ、真崎って、わかんないだもん、得体が知れなくて」

「悪かったな、得体が知れなくて。ついでに教えてやるよ、俺はな」

「なに?」

身構えた里奈に、英彰はナナメから実にひねくれた眼差しを向けてくる。

「諦めがどうしようもなく悪いんだよ。覚悟しとけよ。クラスが変わったって絶対に疎遠になんてなってやらないからね」

「め、迷惑!」

「なんつても言えよ」

英彰が笑う。

意地悪にからかうみたいになんか言葉をつけて。

「おまえのどこがいいんだかさっぱりわかんないところが、我ながら痛いところだけ」

「なにが痛いだー！！ あんたなんか絶対にお断りよ ツー！」

里奈は自分の部屋でクッションをぶん投げている。

帰宅してからも、こ憎っいたらしい英彰の言葉が思い出されて、思い出されて、癩癩を爆発させずにはいられない。

悔しい悔しいくやしいつ！

ぶすつとしてクッションを抱えこんだら、ノックの音がした。

はっとして、里奈は時計を見た。

姿鏡でさっとな自分の服装をチェックしてから、ドアに歩み寄る。

いつ、ピンポンがなったんだろ、エキサイトしすぎてわかんなかった。

「おーい、がきんちよ、さっきからなに暴れてんだよ？ さっさと開けるって」

心臓が止まりそう。

その声を聞いただけで。

里奈は強い鼓動を刻む胸をそつと押さえて、深呼吸をする。

ドアを開く。

「よお、久し振り」

大好きな細い目が笑ってる。

少しだけ照れくさそうに、鼻のあたりを指で触れる仕草。

「聞いてよ、聡明！！」

「いきなりそれかよ？！ 先生、けがの具合はどう？ とか、そー

ゆーのはねえのかおまえは！」

「だって、元気そうなんだもん。聡明は殺しても死ななそうだし」

「俺はゴキブリじゃねえぞ、コラ」

頭にこつんとやられるかと思ったら、聡明の手のひらはぽんぽんとしてくれた。

「長いこと、ほっという悪かったな」

自分の頭をなぜながら、里奈はどういう顔をすればいいのかわから

なくて、俯いた。

涙腺はちよっぴり緩めになってしまっ。

ホントだよ。

寂しかったよ。

以前と違って、言えないこといっぱいあるけど。

でも、あなたには聞いてほしいこともいっぱいある。

なにかから話そうかな。

なにかから聞いてくれる？

ねえ、聡明？

FIN

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9438z/>

Babyleaf

2011年12月29日15時48分発行